

Ⅲ

授業科目及び履修方法

2020年度以降入学生用 教育課程表(授業科目開講一覧表)

※開講時期は、変更となる場合があるので、毎年シラバス等で確認すること。

科目区分	科目コード	科目ナンバリング	科 目 名	単 位 数			開講時期(●)				担 当 教 員	
							1年		2年			
				必修	選択	自由	春	秋	春	秋		
基礎科目	5101	HSAL1001	健康科学特論Ⅰ	2			●				後藤勝正、金井章、石田和人、富田秀仁	
	5102	HSAL1002	健康科学特論Ⅱ	2				●			肥田岳彦、蒔田寛子、藤井徹也	
専門科目	リハビリテーション学領域	5105	HSBM1001	障害回復支援理学療法論		2			●			後藤勝正、富田秀仁、小竹伴照
		5106	HSBM1002	病態運動学論		2		●				金井章
		5108	HSCM1001	運動機能解析学特論		4		●				金井章
		5110	HSCM1002	生体機能学特論		4		●				後藤勝正
		5113	HSCM1003	生体構造学特論		4		●				肥田岳彦
		5114	HSCM1004	リハビリテーション神経科学特論		4		●				石田和人
		5115	HSCM1005	身体運動制御学特論		4		●				富田秀仁
	看護学領域	5126	HSDM1001	在宅・家族看護学特論		4		●				蒔田寛子
		5127	HSDM1002	実践看護基礎学特論		4		●				大島弓子
		512A	HSDM1003	実践看護技術学特論		4		●				藤井徹也
		5128	HSBM1003	看護倫理論		2			●			大島弓子
		5129	HSBM1004	看護理論		2		●				大島弓子
		512B	HSBM1005	周術期看護管理論		2		●				中村裕美
		512C	HSBM1006	がん医療社会学論		2			●			大野裕美
	512D	HSBM1007	老年看護援助論		2			●			山根友絵	
	専門基礎領域	5131	HSEM1001	適応生理学論		2		●				後藤勝正
		5132	HSEM2008	医療統計論		2				●		中川博文
		5133	HSEM1002	生体構造論		2		●				肥田岳彦
		5134	HSEM1003	研究論		2		●				金井章、蒔田寛子、加藤知佳子、肥田岳彦、藤井徹也
5135		HSEM2009	対人コミュニケーション論		2				●		加藤知佳子	
5138		HSEM1004	コンサルテーション論		2			●			桂川純子	
5139		HSEM1005	老年期地域健康支援論		2		●				石田和人	
513C		HSEM1006	神経科学健康論		2			●			石田和人	
513D		HSEM1007	身体運動解析論		2			●			富田秀仁	
513F		HSEM2010	ストレスマネジメント論		2				●		本年度は開講せず	
課題研究科目	5141	HSFM1001	健康科学特別研究Ⅰ	2				●			後藤勝正、金井章、石田和人、肥田岳彦、富田秀仁、大島弓子、蒔田寛子、藤井徹也	
	5142	HSFM2002	健康科学特別研究Ⅱ	4					●			
	5143	HSFM2003	健康科学特別研究Ⅲ	6						●		

2019年度以降入学生用 教育課程表(授業科目開講一覧表)

※開講時期は、変更となる場合があるので、毎年シラバス等で確認すること。

科目区分	科目コード	科目名	単位数			開講時期(●)				担当教員	
						1年		2年			
			必修	選択	自由	春	秋	春	秋		
基礎科目	5101	健康科学特論Ⅰ	2			●				後藤勝正、金井章、石田和人、 富田秀仁	
	5102	健康科学特論Ⅱ	2				●			肥田岳彦、蒔田寛子、藤井徹也	
専門科目	リハビリテーション学領域	5105	障害回復支援理学療法論		2			●			後藤勝正、富田秀仁、小竹伴照
		5106	病態運動学論		2		●				金井章
		5108	運動機能解析学特論		4		●				金井章
		5110	生体機能学特論		4		●				後藤勝正
		5113	生体構造学特論		4		●				肥田岳彦
		5114	リハビリテーション神経科学特論		4		●				石田和人
		5115	身体運動制御学特論		4		●				富田秀仁
	看護学領域	5126	在宅・家族看護学特論		4		●				蒔田寛子
		5127	実践看護基礎学特論		4		●				大島弓子
		512A	実践看護技術学特論		4		●				藤井徹也
		5128	看護倫理論		2			●			大島弓子
		5129	看護理論		2		●				大島弓子
	専門基礎領域	5131	適応生理学論		2		●				後藤勝正
		5132	医療統計論		2				●		中川博文
		5133	生体構造論		2		●				肥田岳彦
		5134	研究論		2		●				金井章、蒔田寛子、加藤知佳子、 肥田岳彦、藤井徹也
		5135	対人コミュニケーション論		2				●		加藤知佳子
		5138	コンサルテーション論		2			●			桂川純子
5139		老年期地域健康支援論		2		●				石田和人	
513C		神経科学健康論		2			●			石田和人	
513D		身体運動解析論		2			●			富田秀仁	
課題研究科目	5141	健康科学特別研究Ⅰ	2				●			後藤勝正、金井章、肥田岳彦、 石田和人、富田秀仁、大島弓子、 蒔田寛子、藤井徹也	
	5142	健康科学特別研究Ⅱ	4					●			
	5143	健康科学特別研究Ⅲ	6						●		

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51010				
科目	5101 健康科学特論 I		授業種別	週間授業				
担当教員	後藤 勝正		単位数	2				
その他担当者	金井 章、富田 秀仁、石田 和人							
授業概要	健康生活を支援するために必要な健康決定要因など健康科学に関する知識の修得に当たり、「心身機能・身体構造」について人の生活行動に関係の深い「運動系」「神経系」を中心に、基礎医学およびリハビリテーション学の視点から、健康の回復・維持・増進の支援に関する専門系知識を再構成し、「健康長寿」を追究するための基礎的知識を修得する。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○		○				
授業の到達目標	本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」を目指して、以下の目標を設定する。 ①ホメオスタシスと可塑性とその意義について説明できる。 ②姿勢制御とその意義が説明できる。 ③中枢神経系の機能と障害について説明できる。 ④ヒトの歩行とその意義について説明できる。							
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。							
参考書および参考文献	参考書：その都度、紹介する。							
受講条件	必修科目 履修条件はない。							
事前・事後学習（内容・時間）	課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（2時間程度×14回）。 第1回の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。準備学習や授業外学修事項については、必要に応じて授業中に指示する。							
成績評価	レポートまたは口頭試問：講義内容の基礎的事項に関する問題（60%）、発展・応用問題（40%） 評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。							
評価項目	割合		評価基準					
レポートまたは口頭試問	100%		テーマに対する適切な内容を調べ、質問に対して適切に回答できるか確認する。					
授業の実施方法と授業計画	<p>（後藤 勝正）</p> <p>第1回（講義）ホメオスタシスとタンパク質の保護（双方向） 第2回（講義）幹細胞と再生医学（双方向） 第3回（講義）骨格筋の可塑性と神経筋（双方向）</p> <p>（富田 秀仁）</p> <p>第4回（講義）運動発達総論（実務家教員・双方向） 第5回（講義）姿勢制御の発達と運動発達（実務家教員・双方向） 第6回（講義）動的システム論から見た運動発達（実務家教員・双方向） 第7回（講義）療育的視点から見た運動発達（実務家教員・双方向）</p> <p>（石田 和人）</p> <p>第8回（講義）脳の可塑性と機能回復（実務家教員・双方向） 第9回（講義）運動と脳（実務家教員・双方向） 第10回（講義）ストレスと神経細胞障害（実務家教員・双方向） 第11回（講義）脳卒中のリハビリテーション（実務家教員・双方向）</p> <p>（金井 章）</p> <p>第12回（講義）歩行の進化（実務家教員・双方向） 第13回（講義）人の歩容の生理学（実務家教員・双方向） 第14回（講義）観察による歩行分析（実務家教員・双方向） 第15回（講義）歩行の運動科学（実務家教員・双方向）</p> <p>学生に疑問や質問を投げかけ、学生からの回答に対してさらに答えるなどというやり取りをしながら、ゼミナール形式で授業を行う。 レポートなどの課題については、授業内・授業時間外で質問を常時受け、疑問に対する回答などフィードバックを行う。 受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。</p>							
ナンバリング	HSAL5001							

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51020			
科目	5102 健康科学特論Ⅱ		授業種別	週間授業			
担当教員	肥田 岳彦		単位数	2			
その他担当者	蒔田 寛子、藤井 徹也						
授業概要	健康科学特論Ⅰに引き続き、『健康の定義』『障害者』『高齢者』『家族』『健康増進』『身体の構造』の視点から健康科学について構築し、さらに健康の回復・維持・増進を支援する専門的知識を追求し、『健康長寿』を支援するための基礎的知識を修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	○	◎		
授業の到達目標	①健康とは何か定義づけ、解説できる。 ②障害と健康との関係を解説できる。 ③健康増進のための介入方法を理解し、説明できる。 ④高齢者・障害者の健康問題と支援方法を解説できる。 ⑤性にまつわる健康問題と支援方法を解説できる。 ⑥健康を維持するための身体の生体防御機構を機能形態学的に解説できる。						
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。 参考書：その都度、紹介する。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	必修科目						
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当） 毎回の授業計画にそって、事前学修、事後学修をして臨むこと						
成績評価	各担当教員から、テーマを設定してレポートの提出を求める。提出されたレポート内容と受講態度で総括評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポート	90%		レポート内容の完成度を確認する。				
受講態度	10%		主体的学修態度を確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>（藤井徹也）</p> <p>第1回：健康の定義（実務教員、双方向） 第2回：健康と障害の関係（実務教員、双方向） 第3回：健康増進のための介入方法①（実務教員、双方向） 第4回：健康増進のための介入方法②（実務教員、双方向） 第5回：わが国のまつわる健康問題と支援方法の現状（実務教員、双方向）</p> <p>（蒔田寛子）</p> <p>第6回：わが国における高齢者の状況（実務家教員、双方向） 第7回：地域包括ケアにおける高齢者支援の実際と課題（実務家教員、双方向） 第8回：多様化する在宅ケアの対象者と法制度の改革（実務家教員、双方向） 第9回：地域包括ケアにおける高齢者支援の課題（看護学の視点から） 学生のプレゼンテーションをもとに意見交換を行い、地域包括ケアにおける高齢者支援について理解を深める（実務家教員 双方向） 第10回：地域包括ケアにおける高齢者支援の課題（リハビリテーション学の視点から） 学生のプレゼンテーションをもとに意見交換を行い、地域包括ケアにおける高齢者支援について理解を深める（実務家教員 双方向）</p> <p>（肥田岳彦）</p> <p>第11回：骨の多角的見方について。運動器疾患から考察する。（双方向） 第12回：内部環境の恒常性から、様々な疾患を考察する。（双方向） 第13回：体液の調節から、様々な実感を考察する。（双方向） 第14回：臓器の機能調節を神経系及内分泌系から考察する。（双方向） 第15回：外部環境からの攻撃により生体を防御する構造と機能を考察する（双方向）</p>						
ナンバリング	HSAL5002						

開講年度・開講学期	2020 年度 秋学期		授業コード	51050			
科目	5105 障害回復支援理学療法論		授業種別	週間授業			
担当教員	後藤 勝正		単位数	2			
その他担当者	小竹 伴照、富田 秀仁						
授業概要	現代医療におけるリハビリテーションと理学療法戦略の最新の動向を基に、理学療法における対象疾患の中心である運動器障害と神経系障害を中心に、これらの障害により生じる運動機能障害に対する治療・介入方法の歴史的考察、および最近の諸説と論点を理論的に統合し新たな実践体系を構築するための理論展開を図る。そのために障害者像、評価方法、各障害への取り組み方について再考しながら学修する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	○			
授業の到達目標	本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」、「研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探求する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持つ」、「人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につける」ことを目指す。そのために、以下の到達目標を設定する。 1. 運動器疾患・神経系疾患の病態を理解し、治療とリハビリテーションの方針を立てることができる。 2. 運動器障害と中枢神経系障害の理学療法の評価方法と治療体系について最新の知見をもとに説明できる。 3. 高齢者の運動生理を理解し、障害回復ための理学療法の方針を立てることができる。						
テキスト（教科書）	後藤分担分：宮原英夫ほか監訳 加齢と運動の生理学. 朝倉書店、ISBN：978-4-254-69044-6						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	特になし。						
事前・事後学習（内容・時間）	課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（3時間程度×14回）。						
成績評価	レポートあるいは口頭試問：授業内容の基本事項に関する問題（60%）、発展・応用問題（40%）評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートあるいは口頭試問	100%		テーマに対して適切に調べ、かつ質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>(小竹 伴照)</p> <p>第 1 回 (講義) リハビリテーションにおける理学療法戦略 (評価) (実務家教員)</p> <p>第 2 回 (講義) リハビリテーションにおける理学療法戦略 (治療・介入) (実務家教員)</p> <p>第 3 回 (講義) 運動器障害の治療とリハビリテーション戦略 (実務家教員)</p> <p>第 4 回 (講義) 神経系障害の治療とリハビリテーション戦略 (実務家教員)</p> <p>第 5 回 (講義) 高齢者のリハビリテーション戦略 (実務家教員)</p> <p>(富田 秀仁)</p> <p>第 6 回 (講義) 運動器障害に対する理学療法の評価方法とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 7 回 (講義) 運動器障害に対する理学療法の治療体系とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 8 回 (講義) 中枢神経障害 (痙性麻痺) に対する理学療法の評価方法とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 9 回 (講義) 中枢神経障害 (痙性麻痺) に対する理学療法の治療体系とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 10 回 (講義) 中枢神経系障害 (運動失調) に対する理学療法の評価方法とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 11 回 (講義) 中枢神経系障害 (運動失調) に対する理学療法の治療体系とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 12 回 (講義) 中枢神経障害 (大脳基底核関連疾患) に対する理学療法の評価方法とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>第 13 回 (講義) 中枢神経障害 (大脳基底核関連疾患) に対する理学療法の治療体系とその再考 (実務家教員・双方向)</p> <p>(後藤 勝正)</p> <p>第 14 回 (講義) 高齢者の運動生理 (1) (双方向)</p> <p>第 15 回 (講義) 高齢者の運動生理 (2) (双方向)</p> <p>学生に疑問や質問を投げかけ、学生からの回答に対してさらに答えるなどというやり取りをしながら、ゼミナール形式で授業を行う。 レポートなどの課題については、授業内・授業時間外で質問を常時受け、疑問に対する回答などフィードバックを行う。 ただし、受講学生の習熟度により授業計画を変更することもある。</p>						
ナンバリング	HSBM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期			授業コード	51060		
科目	5106 病態運動学論			授業種別	週間授業		
担当教員	金井 章			単位数	2		
その他担当者							
授業概要	ヒトが日常生活を送る上で必要な各種動作を行うためには、各関節が協調的に機能することが重要となる。その中で筋は、関節運動における主要な役割を果たしていると同時に、関節へ力学的ストレスを与えている。そのような関節への生体力学的作用を理解し、リハビリテーションを行う上で問題となる運動器障害の病態と、各種動作に及ぼす影響について学ぶ。また、その効果的な機能再建方法について学修する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	○			
授業の到達目標	<p>本講義では、ヒトの運動機能の障害となる関節の病態とそれによる動作への影響について理解し、臨床において適切に動作分析を行うための基礎的能力を修得することを目的として、到達目標を以下の通りとした。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ヒトの起居動作を運動学・運動力学により説明できる。 ② スポーツにおける身体運動を運動学・運動力学により説明ができる。 ③ 骨・関節・筋の力学特性を説明できる。 ④ 身体運動による関節への力学的ストレスを説明できる。 ⑤ 外傷による運動器障害の病態を説明できる。 						
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。						
参考書および参考文献	<p>参考書 キネシオロジーよりみた運動器の外傷：島津晃 編著，金原出版（株） ヒューマン ウォーキング 原著第3版：Jessica Rose ほか編／武田功 監訳／弓岡光徳 ほか訳，医歯薬出版株式会社 身体運動のバイオメカニクス研究法：ゴードン・ロバートソンほか 監訳／阿江通良、大修館書店</p>						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人の運動・動作について理解するための基礎となる、解剖学、生理学、運動学を再学習しておくこと（第1～15回/1時間程度）。 2. 運動器疾患の病態についてまとめておくこと（第1～15回/1時間程度）。 3. 講義で学んだ内容について、基礎医学、臨床運動学の視点から、その都度復習を行うこと（第1～15回/1時間程度）。 						
成績評価	適宜、講義テーマに関する総合討論から総括評価するが、その他詳細は第1回目の授業時に説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートまたは口頭試問	100%		テーマに対する適切な内容を調べ、質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 第1回（講義）身体運動学と運動力学（実務家教員） 第2回（講義）立位（実務家教員） 第3回（講義）起居動作（実務家教員） 第4回（講義）歩行（実務家教員） 第5回（講義）走行、ジャンプ（実務家教員） 第6回（講義）把握、投球（実務家教員） 第7回（講義）骨・軟骨の力学特性（実務家教員） 第8回（講義）筋・靭帯の力学特性（実務家教員） 第9回（講義）外傷の力学（実務家教員） 第10回（講義）下肢の損傷（実務家教員） 第11回（講義）上肢の損傷（実務家教員） 第12回（講義）脊椎の損傷（実務家教員） 第13回（講義）人工関節、生体材料（実務家教員） 第14回（講義）杖、装具（実務家教員） 第15回（講義）バイオメカニクス手法（実務家教員） <p>受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。</p>						
ナンバリング	HSBM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期～秋学期				授業コード	51080		
科目	5108 運動機能解析学特論				授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）		
担当教員	金井 章				単位数	4		
その他担当者								
授業概要	ヒトは、地球上で生活するからには重力から逃れることはできない。そのため、姿勢の保持や動作を行う場合には、重力に抗した身体の活動が必要となる。その機能は、老化や各種疾患により低下し、日常生活に多くの問題を引き起こす。本講義では、三次元動作解析装置や筋電図を用いた運動機能の解析と、その結果に基づいて姿勢や動作能力の改善を計るためのリハビリテーション手法を先行研究から学修する。また、研究実施に向けた研究計画の立案と方法の選択を行う。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○			
授業の到達目標	<p>本授業では、ヒトの動作を分析し、問題点を抽出、対策を立案するための実践能力を修得する事を目的として、到達目標を以下の通りとした。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① ヒトの歩行について説明できる。 ② 計ることの意味について説明できる。 ③ 身体運動の計測手法について説明できる。 ④ 研究目的と計画立案のために適切な資料を集めることができる。 ⑤ 研究目的を設定し、それに適合した計測の実施ができる。 ⑥ 計測結果を適切な方法で解析し、説明できる。 ⑦ 研究報告書を作成し、その結果を発表できる。 							
テキスト（教科書）	特に設定しない。							
参考書および参考文献	ヒトの動き百話～スポーツの視点からリハビリテーションの視点まで～：小田伸午 ほか編，市村出版 関節モーメントによる歩行分析：臨床歩行分析研究会編、医師薬出版							
受講条件	受講条件は特はない							
事前・事後学習（内容・時間）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人の運動・動作の計測から解析を行うために必要な基礎的知識である、解剖学、生理学、運動学について、再学習をして講義に臨むこと（第1～30回/30分）。 2. 講義内容に関連する学術論文を読み、提示できるようまとめておくこと（第1～28回/60分）。 3. 講義で学んだことを実践できるよう、学習内容の復習、データ解析手法の見直しと確認を行うこと（第2～28回/60分）。 							
成績評価	課題発表（30%）、文献抄読（30%）、運動機能計測演習（30%）、総合討論（10%）から総括評価する。評価についての詳細は、第1回目の授業時に説明する。							
評価項目	割合		評価基準					
課題発表	30%		テーマに対して適切な内容を調べ、報告できるか確認する。					
文献抄読	30%		テーマに対して適切な文献を読み、まとめられているか確認する。					
運動機能計測演習	30%		目的に合った方法を用いて、適切な機器の使用をし、結果を整理できるか確認する。					
総合討論	10%		ヒトの動作を分析し、問題点の抽出、対策を立案する過程において、適切な議論を行う事が出来るか確認する。					
授業の実施方法と授業計画	<p>第1回（講義）基礎学習1：ヒトの進化（実務家教員）</p> <p>第2回（講義）基礎学習2：歩行の獲得（実務家教員）</p> <p>第3回（講義）基礎学習3：歩行によりもたらされたもの（実務家教員）</p> <p>第4回（講義）計測法入門1：計ることの意味（実務家教員）</p> <p>第5回（講義）計測法入門2：計測デザイン（実務家教員）</p> <p>第6回（講義）計測法入門3：姿勢と動作の計測（実務家教員）</p> <p>第7回（講義）研究計画と手法の選択（実務家教員）</p> <p>第8回（講義）臨床研究の基礎：研究倫理・手法（実務家教員）</p> <p>第9回（講義）運動機能解析の基礎（実務家教員）</p> <p>第10回（講義・演習）運動機能計測演習（グループワーク）（実務家教員・双方向）</p> <p>第11回（講義・演習）運動機能計測演習（グループワーク）（実務家教員・双方向）</p> <p>第12回（講義・演習）運動機能解析演習（グループワーク）（実務家教員・双方向）</p> <p>第13回（講義）関連文献の収集と選択（実務家教員）</p> <p>第14回（講義・演習）関連文献の抄読と討論（ディスカッション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第15回（講義・演習）関連文献の抄読と討論（ディスカッション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第16回（講義）研究目的の設定（実務家教員）</p> <p>第17回（講義・演習）研究目的の妥当性の検討（ディスカッション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第18回（講義）研究計画の立案（実務家教員）</p> <p>第19回（講義・演習）研究計画の妥当性の検討（ディスカッション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第20回（講義）実験方法の選択（実務家教員）</p> <p>第21回（講義・演習）実験方法の妥当性の検討（ディスカッション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第22回（講義）実験結果の収集法（実務家教員）</p> <p>第23回（講義・演習）実験結果の収集法の妥当性の検討（ディスカッション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第24回（講義）実験データの解析法（実務家教員）</p> <p>第25回（講義・演習）実験データの解析：統計学的手法（ディスカッション）（実務家教員）</p> <p>第26回（講義・演習）研究報告書の作成：論文作成方法（ディスカッション）（実務家教員）</p> <p>第27回（講義・演習）研究報告書の作成：結果の提示（ディスカッション）（実務家教員）</p> <p>第28回（講義・演習）研究報告書の作成：考察と文献引用法（ディスカッション）（実務家教員）</p> <p>第29回（演習）総合討論（プレゼンテーション）（実務家教員・双方向）</p> <p>第30回 総合討論（議論）（実務家教員・双方向）</p>							
ナンバリング	HSCM5001							

開講年度・開講学期	2020 年度 春学期～秋学期		授業コード	51100			
科目	5110 生体機能学特論		授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）			
担当教員	後藤 勝正		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	生体機能の科学的評価ならびにその評価に基づいた機能回復・維持・増進のための方策の計画・立案などに関する知識を学修する。特に、生活機能において主要な役割を果たしている骨格筋機能に焦点を当て、様々な刺激に対する応答から生活の質（QOL）および健康の維持増進に関連する先行研究を中心に比較検討し、総合的かつ専門的知識と技術を学修すると共に、研究実施に向けた研究計画の立案と方法の選択を行う。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○		
授業の到達目標	本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」、「社会的な動向に関心を持ち、関連する領域の知見を統合して、独創的で新しい視点を提起できる」、「研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探索する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持つ」ことを目指す。そのために、以下の到達目標を設定する。 ①研究目的の設定ならびに研究計画の立案のために適切な資料を集めることができる。 ②研究目的に適合した実験方法を選択し、その妥当性を説明できる。 ③研究目的に適合した実験データの解析を選択し、その妥当性を説明できる。 ④研究結果を発表し、その実験結果について議論できる。 ⑤研究報告書を作成できる。						
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。						
参考書および参考文献	参考書：その都度、紹介する。						
受講条件	特になし。						
事前・事後学習（内容・時間）	課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（2時間程度×29回）。 第1回の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。準備学習や授業外学修事項については、必要に応じて授業中に指示する。						
成績評価	レポートあるいは口頭試問：抄読した文献や演習内容についての基本的事項（60%）、発展・応用問題（40%） 評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートあるいは口頭試問	100%		テーマに対する適切な内容を調べ、質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>設定したテーマについてゼミナル形式で授業を展開する。</p> <p>第1回（講義）研究計画と手法の選択（双方向） 第2回（講義）動物実験の基礎（研究倫理・手法）（双方向） 第3回（講義）ヒトを対象とした実験の基礎（研究倫理・手法）（双方向） 第4回（講義）骨格筋機能の生理学的評価（双方向） 第5回（講義）骨格筋機能の形態学的評価（双方向） 第6回（講義）骨格筋機能の発現と遺伝子・タンパク質（双方向） 第7回（講義）骨格筋機能低下①（損傷とその評価）（双方向） 第8回（講義）骨格筋機能低下②（損傷とその再生）（双方向） 第9回（講義）骨格筋機能向上①（機械的刺激に対する骨格筋機能の応答）（双方向） 第10回（講義）骨格筋機能向上②（温熱刺激に対する骨格筋の応答）（双方向） 第11回（講義）骨格筋機能低下とリハビリテーション（双方向） 第12回（講義）生体機能のリハビリテーション（双方向） 第13回（講義）骨格筋機能とQOL（双方向） 第14回（演習）関連文献の抄読と討論（生体外刺激に対する応答）（双方向） 第15回（演習）関連文献の抄読と討論（atrophic刺激に対する応答）（双方向） 第16回（講義）研究目的の設定（双方向） 第17回（演習）研究目的の妥当性の検討（双方向） 第18回（講義）研究計画の立案（双方向） 第19回（演習）研究計画の妥当性の検討（双方向） 第20回（講義）実験方法の選択（双方向） 第21回（演習）実験方法の妥当性の検討（双方向） 第22回（講義）実験結果の収集法（双方向） 第23回（講義・演習）実験結果の収集法の妥当性の検討（双方向） 第24回（講義）実験データの解析法（双方向） 第25回（講義）実験データの解析（統計学的手法）（双方向） 第26回（講義・演習）研究報告書の作成（論文作成方法）（双方向） 第27回（講義・演習）研究報告書の作成（結果の提示：作表および作図）（双方向） 第28回（講義・演習）研究報告書の作成（考察と文献引用法）（双方向） 第29回（演習）総合討論（プレゼンテーション）（双方向） 第30回（演習）総合討論（議論）（双方向）</p> <p>学生に疑問や質問を投げかけ、学生からの回答に対してさらに答えるなどというやり取りをしながら、ゼミナル形式で授業を行う。 レポートなどの課題については、授業内・授業時間外で質問を常時受け、疑問に対する回答などフィードバックを行う。 受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。</p>						
ナンバリング	HSCM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期～秋学期				授業コード	51130		
科目	5113 生体構造学特論				授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）		
担当教員	肥田 岳彦				単位数	4		
その他担当者								
授業概要	<p>私たちのからだの構造は、さまざまな構造があつまって構成されている。その構造は表層から深層に向かって階層性として捉えられている。その中で、リハビリテーションとして扱われる密度の高い分野は運動器としての骨と筋ならびに神経系である。</p> <p>生体構造論特論では、骨と骨格筋と筋をコントロールしている神経系に焦点をあて、ものの見方、そこから得られる問題を探求すると共にヒトの見方を学ぶことによって得られる生体構造を探求する。生体構造の理論的観点を学ぶことによって生体構造だけでなく生体機能にまで幅広く考察する学び方を習得する。</p> <p>実際の研究活動を通して、生体構造・機能の基本的な内容から発展的な内容および知識を探求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実際、結果の吟味と考察および総合討論へと研究を展開している道筋を展開する。</p>							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○			
授業の到達目標	<p>①運動器（骨と筋）を多角的な見方および考え方によって生体の規則性が説明できる。</p> <p>②運動器（骨と筋）の構造と機能から神経科学へ応用する考えが説明できる。</p> <p>③研究目的の設定および研究計画の立案のために適切な資料を集めることができる。</p> <p>④研究目的を設定し、その多角性を説明でき、研究計画を立案し、その妥当性を説明できる。</p> <p>⑤研究目的に適合した実験方法を選択し、その妥当性を説明できる。</p> <p>⑥研究目的に適合した実験結果の収集法を選択肢、その妥当性を説明できる。</p> <p>⑦計画・立案を説明できる。</p> <p>⑧研究報告書を作成できる。</p> <p>⑨研究結果を発表し、その実験結果について議論できる。</p>							
テキスト（教科書）	特に指定しない。							
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。							
受講条件	履修条件はない。							
事前・事後学習（内容・時間）	第1回の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。なお、準備学習については、必要に応じて授業中に説明する。骨及び筋を中心とした内容を網羅する運動器の講義内容を再確認する。授業内容の中から、指示した内容について、事前に調べて授業に参加すること。							
成績評価	小テスト（50%）課題レポート（50%）から判断する。							
評価項目	割合				評価基準			
定期試験	50%				筆記試験にて講義内容の理解度を確認する（基礎問題80%、応用問題20%）。			
小テスト	25%				分野ごと、講義内容の理解度を確認する。			
課題レポート	25%				課題に対する適切な内容・記述になっているかを確認・評価する。			
授業の実施方法と授業計画	<p>第1回：人骨の見方、考え方 骨の形態的特長を人骨から捉えることにより、ヒトの形と運動について説明する。</p> <p>第2回：動物実験の基礎と実際 研究倫理と動物種および実験動物の取り扱いについて。</p> <p>第3回：ヒトを対象とした実験の基礎および研究倫理とその手技 献体団体の存在と人骨の観察およびその評価</p> <p>第4回：骨および骨格筋の形態学的評価 中軸性骨格と体性骨格、中軸せい骨格筋、体性骨格筋、鰹弓性骨格筋について</p> <p>第5回：骨および骨格筋の機能的評価 骨のリモデリングと骨格筋線維の機能的特徴、骨吸収のメカニズム</p> <p>第6回：骨の形態的特長から骨格筋の発達状態への考え方およびその評価 骨格筋の付着部位の形態計測から骨格筋の発達状態を考察して評価する</p> <p>第7回：中枢神経系の構造と機能について（1） 中枢神経系とは、大脳半球に見られる機能局在から骨格筋の神経経路を考える</p> <p>第8回：中枢神経系の構造と機能について（2） 小脳構造と機能、脳幹の分類とそれぞれの機能的解析を考える</p> <p>第9回：中枢神経系の神経活性物質と受容体（1） 神経伝達物質の現在と未来</p> <p>第10回：中枢神経系の神経活性物質と受容体（2） モノアミンとインドールアミンおよびアミノ酸について</p> <p>第11回：末梢神経系とは、脳神経 12対の脳神経の名称と機能について</p> <p>第12回：末梢神経系とは、脊髄神経 31付きの脊髄神経の名称と既往および神経叢の構成要素と代表的な神経枝名について</p> <p>第13回：下行性伝導路について 錐体路および錐体外路系について</p> <p>第14回：上行性伝導路について 後索路と側索路を通る感覚性伝導路の実際</p> <p>第15回：上位運動ニューロンおよび下位運動ニューロン 神経経路と神経伝達物質について</p> <p>第16回：大脳辺縁系の構造と機能 辺縁系の構成要素と記憶に関するパベツ回路とその神経経路</p> <p>第17回：関連文献の抄読と討論 人類学の論文</p> <p>第18回：関連論文の抄読と討論 形態学の論文および神経科学の論文</p> <p>第19回：研究目的の設定</p> <p>第20回：研究目的の妥当性の検討</p> <p>第21回：研究計画の設定</p> <p>第22回：研究計画の妥当性の検討</p> <p>第23回：実験方法の設定</p> <p>第24回：実験方法の妥当性の検討</p> <p>第25回：実験結果の収集方法</p> <p>第26回：実験結果の収集方法の妥当性の検討</p> <p>第27回：実験データの解析法</p> <p>第28回：実験データの解析 統計学的手法</p> <p>第29回：研究報告書の作成（1） 論文作成手法</p> <p>第30回：研究報告書の作成（2） 研究結果の提示および作表、作図、考察と文献引用法、総合討議（プレゼンテーション） ゼミナール形式（双方向）</p>							
ナンバリング	HSCM5003							

開講年度・開講学期	2020年度 春学期～秋学期		授業コード	51140			
科目	5114 リハビリテーション神経科学特論		授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）			
担当教員	石田 和人		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	神経科学を基盤とした科学的根拠に基づくリハビリテーションの在り方を学び、当該分野における知識と思考力を身につける。特に、新しい学術情報に触れながら議論を深める。そのため、本授業において、まずは神経科学の基礎を学び、病態モデルを用いたリハビリテーション効果に関する研究に触れ、さらにはリハビリテーションの臨床への応用・展開する方向性を考える素養を身につけることを目的とする。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○		
授業の到達目標	本授業では、神経科学に関する基礎および応用的な知見に触れ、本分野の豊かな知識を得るとともに、研究実践に向けた技量を育成する。そのためには具体的に下記を目指す。 ①神経科学分野における多くの論文を集め、読み解くことができる。 ②神経科学分野の知見を元に、人々の健康増進やリハビリテーションの在り方を考察できる。 ③研究目的と計画立案のための適切な資料を集めることができる。 ④研究目的を設定し、それに適合した計測の実施ができる。 ⑤計測結果を適切に解析し、説明できる。 ⑥研究報告書を作成し、その結果を発表できる。						
テキスト（教科書）	特に設定しないが、必要に応じて参考書および参考資料を提示する						
参考書および参考文献	適宜文献を紹介する						
受講条件	特になし						
事前・事後学習（内容・時間）	授業の復習（各1時間程度） 発表課題が担当の場合はその準備（各3時間程度）						
成績評価	レポートおよび口頭試問：抄読した文献および演習内容に関する基本的事項（60%）、発展的および応用的問題（40%） 詳細については、初回授業の際に説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートまたは口頭試問	100%		テーマに対する適切な内容を調べ、質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	第1回 リハビリテーションと神経科学（実務家教員） 第2回 研究方法論1：研究計画法概論（実務家教員） 第3回 研究方法論2：動物実験の基礎（実務家教員） 第4回 研究方法論3：ヒトを対象とした実験の基礎（実務家教員） 第5回 トランスレーショナル神経科学論1：脊髄損傷モデル（実務家教員） 第6回 トランスレーショナル神経科学論2：脳梗塞モデル（実務家教員） 第7回 トランスレーショナル神経科学論3：脳出血モデル（実務家教員） 第8回 トランスレーショナル神経科学論4：抑うつモデル（実務家教員） 第9回 神経科学基礎研究の潮流1：基礎医学（実務家教員） 第10回 神経科学基礎研究の潮流2：臨床医学（実務家教員） 第11回 行動学的解析手法1：動物実験における運動機能の評価（実務家教員） 第12回 行動学的解析手法2：動物実験における認知機能の評価（実務家教員） 第13回 関連文献の収集と選択（実務家教員） 第14回 関連文献の抄読と討論1（実務家教員） 第15回 関連文献の抄読と討論2（実務家教員） 第16回 研究目的の設定（実務家教員） 第17回 研究目的の妥当性の検討（実務家教員） 第18回 研究計画の立案（実務家教員） 第19回 研究計画の妥当性の検討（実務家教員） 第20回 実験方法の選択（実務家教員） 第21回 実験方法の妥当性の検討（実務家教員） 第22回 実験結果の収集法（実務家教員） 第23回 実験結果の収集法の妥当性の検討（実務家教員） 第24回 実験データの解析法（実務家教員） 第25回 実験データの解析（統計学的手法）（実務家教員） 第26回 研究報告書の作成（論文作成方法）（実務家教員） 第27回 研究報告書の作成（結果の提示：作表および作図）（実務家教員） 第28回 研究報告書の作成（考察と文献引用法）（実務家教員） 第29回 総合討論（プレゼンテーション）（実務家教員） 第30回 総合討論（議論）（実務家教員） ゼミナール形式で授業を勧める。 受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。						
ナンバリング	HSCM5004						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期～秋学期				授業コード	51150		
科目	5115 身体運動制御学特論				授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）		
担当教員	富田 秀仁				単位数	4		
その他担当者								
授業概要	運動障害を改善することは理学療法の重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。本授業では、まずは健康なヒトにおいて運動時に姿勢がどのように制御されているのかを学ぶ。さらに、姿勢制御の研究がどのようになされるのかの方法論について実際に測定を行うことで理解する。そして、代表的な疾患で運動制御や姿勢制御がどのように障害されるのかについて学習し、それに対してどのような理学療法を行うべきかについて議論する。 その後、関連する文献研究を行いながら、研究実施に向けた研究計画の立案と方法の選択を行う。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○			
授業の到達目標	①代表的な運動制御理論と姿勢制御理論について説明できる。 ②正常なヒトにおける姿勢制御の特徴について説明できる。 ③姿勢制御の研究の方法論を説明できる。 ④代表的な疾患で運動制御と姿勢制御がどのように障害されるのかを説明でき、理学療法アプローチを考察することができる。 ⑤研究目的と計画立案のために適切な資料を集めることができる。 ⑥研究目的を設定し、それに適合した計測の実施ができる。 ⑦計測結果を適切な方法で解析し説明できる。 ⑧研究計画書を作成し、その結果を発表できる。							
テキスト（教科書）	特に設定しない。							
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。							
受講条件	なし							
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当） 1. ヒトの身体運動について理解するための基礎となる、解剖学や生理学、運動学を再学習しておくこと。 2. 関連する文献を読み、提示できるようにまとめておくこと。 3. 講義で学んだことを実践できるよう、学習内容の復習、研究計画の見直しと確認を行うこと。							
成績評価	課題発表（30%）、文献抄読（30%）、身体運動制御計測演習（30%）、総合討論（10%）から総括評価する。評価の詳細については第1回の授業時に説明する。							
評価項目	割合		評価基準					
課題発表	30%		テーマに対して適切な内容を調べ、報告できるか確認する。					
文献抄読	30%		テーマに対して適切な文献を読み、まとめられているか確認する。					
身体運動制御計測演習	30%		目的に合った方法を用いて、適切な機器を使用し、結果を整理できるか確認する。					
総合討論	10%		ヒトの姿勢制御を分析し、問題点の抽出、対策を立案する過程において、適切な議論をおこなうことができるか確認する。					
授業の実施方法と授業計画	第1回 身体運動制御とは何か（実務家教員） 第2回 身体運動に影響する因子（個体・課題・環境）（実務家教員） 第3回 運動制御・姿勢制御に関係する神経メカニズム（実務家教員） 第4回 姿勢・運動制御理論（1）（実務家教員） 第5回 姿勢・運動制御理論（2）（実務家教員） 第6回 運動制御と姿勢制御研究の方法論（1）（実務家教員・双方向） 第7回 運動制御と姿勢制御研究の方法論（2）（実務家教員・双方向） 第8回 高齢者における姿勢・運動制御障害（実務家教員） 第9回 脳血管障害における姿勢・運動制御障害（実務家教員） 第10回 腰痛症における姿勢・運動制御障害（実務家教員） 第11回 脳性麻痺における姿勢・運動制御障害（実務家教員） 第12回 姿勢・運動制御障害に対する理学療法（1）（実務家教員・双方向） 第13回 姿勢・運動制御障害に対する理学療法（2）（実務家教員・双方向） 第14回 関連文献の抄読と討論（1）（実務家教員・双方向） 第15回 関連文献の抄読と討論（2）（実務家教員・双方向） 第16回 研究目的の設定（実務家教員・双方向） 第17回 研究目的の妥当性の検討（実務家教員・双方向） 第18回 研究計画の立案（実務家教員・双方向） 第19回 研究計画の妥当性の検討（実務家教員・双方向） 第20回 実験方法の選択（実務家教員・双方向） 第21回 実験方法の妥当性の検討（実務家教員・双方向） 第22回 実験結果の収集法（実務家教員・双方向） 第23回 実験結果の収集法の妥当性の検討（実務家教員・双方向） 第24回 実験データの解析法（実務家教員・双方向） 第25回 実験データの解析法の妥当性の検討（実務家教員・双方向） 第26回 研究報告書の作成（1）（実務家教員・双方向） 第27回 研究報告書の作成（2）（実務家教員・双方向） 第28回 研究報告書の作成（3）（実務家教員・双方向） 第29回 総合討論（1）（実務家教員・双方向） 第30回 総合討論（2）（実務家教員・双方向） ※学生に疑問や質問を投げかけ、学生からの回答に対してさらに答えるというようなやり取りをしながら、ゼミナール形式で授業を行う。 ※受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。							
ナンバリング	HSCM5005							

開講年度・開講学期	2020 年度 春学期～秋学期		授業コード	51260			
科目	5126 在宅・家族看護学特論		授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）			
担当教員	蒔田 寛子		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	世帯構造の変化と急激な少子高齢化、病院から在宅医療への移行の促進に伴い、高い専門性と倫理観を背景とした在宅看護の質向上が期待されている。在宅・家族看護学特論では、地域の中で療養している人と家族を包括的に捉え、安定した日常生活の維持に向けた在宅看護の役割と機能について学ぶとともに、在宅・家族看護学分野をふまえた基礎的な研究手法を修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○		
授業の到達目標	在宅・家族看護学特論の到達目標は、在宅看護学と家族看護学に関連する理論やモデル等について学び、それら知識を用いて現象を説明できることである。また、在宅看護学、家族看護学に関連した事例の検討により、対象の特徴と支援のあり方について深く検討するとともに、文献クリティークにより、それらの分野における研究課題、研究方法について学び、在宅・家族看護学分野の研究を実施する基礎的能力を獲得する。						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	その都度紹介する						
受講条件	受講条件はない						
事前・事後学習（内容・時間）	適宜指示する 授業計画にそってプレゼンテーションの準備をし、またプレゼンテーション終了後には、必要時追加学習を行い、知識を確実にしておくこと。プレゼンテーションには経験と文献からの知識をふまえ、十分に考察された内容の資料を作成すること。						
成績評価	原則として毎回出席すること。授業の到達目標がどの程度達成できているかで評価します。なお、遅刻、早退や劣悪な受講態度は減点の対象とする場合があります。						
評価項目	割合		評価基準				
プレゼンテーションの内容（資料含む）	40%		文献を活用し、論理的に資料が作成され、説明が適切でわかりやすいかで評価する。				
討議への参加度と発言内容	30%		討議への参加度と発言内容の適切さで評価する。				
課題レポート	30%		課題に対する適切な内容が論理的に記述されているかを評価する。				
授業の実施方法と授業計画	第 1 回 オリエンテーション（実務家教員） 第 2 回 在宅看護の考え方（実務家教員） 第 3 回 在宅看護に関するトピックス（実務家教員） 第 4 回 地域包括ケアシステム（実務家教員） 第 5 回 終末期患者の在宅看護（実務家教員） 第 6 回 独居高齢者の在宅看護（実務家教員） 第 7 回 神経系難病患者の在宅看護（実務家教員） 第 8 回 在宅療養する小児の看護（実務家教員） 第 9 回 精神疾患をもつ療養者の在宅看護（実務家教員） 第 10 回 在宅看護の事例検討 寝たきり高齢者の在宅看護：学生の提供事例をもとに寝たきり高齢者の在宅看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 11 回 在宅看護の事例検討 終末期がん患者の在宅看護：学生の提供事例をもとに終末期がん患者の在宅看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 12 回 在宅看護の事例検討 神経系難病患者の在宅看護：学生の提供事例をもとに神経系難病患者の在宅看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 13 回 在宅看護の事例検討 小児の在宅看護：学生の提供事例をもとに小児の在宅看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 14 回 在宅ケアチームにおける多職種連携（実務家教員） 第 15 回 在宅看護研究；文献クリティーク 文献 1：在宅看護に関する文献のクリティークを学生が発表し、さらに教員と他学生からの意見交換を行い、クリティークについて学ぶ（実務家教員・双方向） 第 16 回 在宅看護研究；文献クリティーク 文献 2：在宅看護に関する文献のクリティークを学生が発表し、さらに教員と他学生からの意見交換を行い、クリティークについて学ぶ（実務家教員・双方向） 第 17 回 在宅看護学に関する研究の動向（実務家教員） 第 18 回 家族看護学発展の歴史（実務家教員） 第 19 回 文化的背景と家族のありよう（実務家教員） 第 20 回 家族の定義（実務家教員） 第 21 回 家族の成長と発達（実務家教員） 第 22 回 家族に関する理論（家族システム理論 家族ストレス対処理論）（実務家教員） 第 23 回 家族アセスメントモデルの紹介（カルガリー家族アセスメント/介入モデル）（実務家教員） 第 24 回 家族アセスメントモデルの紹介（渡辺式家族アセスメント/支援モデル）（実務家教員） 第 25 回 家族看護の事例検討 認知症高齢者と家族の看護：学生の提供事例をもとに認知症高齢者と家族の看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 26 回 家族看護の事例検討 終末期がん患者と家族の看護：学生の提供事例をもとに終末期がん患者と家族の看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 27 回 家族看護の事例検討 神経系難病患者と家族の看護：学生の提供事例をもとに神経系難病患者と家族の看護について意見交換を行う（実務家教員・双方向） 第 28 回 家族看護研究；文献クリティーク 文献 1：家族看護に関する文献のクリティークを学生が発表し、さらに教員と他学生からの意見交換を行い、クリティークについて学ぶ（実務家教員・双方向） 第 29 回 家族看護研究；文献クリティーク 文献 2：家族看護に関する文献のクリティークを学生が発表し、さらに教員と他学生からの意見交換を行い、クリティークについて学ぶ（実務家教員・双方向） 第 30 回 家族看護学に関する研究の動向（実務家教員） 授業内容は、進度により変更することもある。 提出されたレポート課題については、コメントをした上で返却します。						
ナンバリング	HSDM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期～秋学期				授業コード	51270		
科目	5127 実践看護基礎学特論				授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）		
担当教員	大島 弓子				単位数	4		
その他担当者								
授業概要	看護学全体の内容的な構造を検討した上で実践基礎看護学の意義、位置づけを考察する。また、看護の本質と目的、対象、看護技術、実践への手だてに関する研究成果を理論的および時代のトピックス性の観点から検討する。さらに、これらの領域において課題となっている事象に対し、取り組む研究方法についても考察する。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○			
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護学全体の内容を概観し内容的な構築と全体の構造をとらえ、実践をふまえた看護学の位置づけを理解できる。 2. 質の高い看護実践をめざす看護の本質、概念について、理論家の多様な主張を含め、多角的な見地から検討し理解できる。 3. 看護の対象についてのとらえ方、見方について、研究成果を含む多様な見地から検討し理解できる。 4. 看護実践の方法論として、看護技術の意義、概念、構造等について、研究成果を含む多様な見地から検討し理解できる。 5. 理論的な看護実践の方法論として、看護過程、アセスメント、看護診断、介入、成果等の実践への活用について吟味を加えた上で理解できる。 6. 看護学の基盤となり、かつ時宜を得た研究課題、特徴的な研究方法について具体的に検討し考察できる。 							
テキスト（教科書）	テキストとして特定のものは使用しない。							
参考書および参考文献	参考書は講義中に紹介する。							
受講条件	なし							
事前・事後学習（内容・時間）	看護実践の中で、課題となる疑問点に感じていることを整理しておく。第1回目の講義時に説明する。							
成績評価	プレゼンテーションと討論、レポートで、総合的に評価する							
評価項目	割合			評価基準				
プレゼンテーションと討論内容	50%			テーマに合った内容を検討したプレゼンテーションが適切にでき、自発に自身の意見が述べて討議できることの視点から評価する				
レポート	50%			看護実践の基盤となる考え方、方法論について、文献の分析と自身の考えでレポートがまとめられていることの視点から評価する				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. Introduction、学びの希望、講義の進め方（実務家教員）（大島） 2. 看護学および臨床における看護についての現状の課題Ⅰ（看護学）：現状分析と課題抽出の討論（実務家教員・双方向）（大島） 3. 看護学および臨床における看護についての現状の課題Ⅱ（臨床）：現状分析と課題抽出の討論（実務家教員・双方向）（大島） 3. 看護学の全体像、各看護学との関連性、（実務家教員）（大島） 4. 看護の本質、概念Ⅰ（～1970年）（実務家教員）（大島） 5. 看護の本質、概念Ⅱ（1970年～）（実務家教員）（大島） 6. 看護理論（広範囲理論）（実務家教員）（大島） 7. 看護理論（中範囲理論、小範囲理論）（実務家教員）（大島） 8. 看護の本質、概念、看護理論・プレゼンテーションおよび討論（実務家教員・双方向）（大島） 9. 看護の対象、統合体（実務家教員）（大島） 10. 看護の対象、対象を理解する視点Ⅰ（生理的）（実務家教員）（大島） 11. 看護の対象、対象を理解する視点Ⅱ（心理社会的）（実務家教員）（大島） 12. 看護における対象の状態の捉え方Ⅰ（生理的アセスメントの意味）（実務家教員）（大島） 13. 看護における対象の状態の捉え方Ⅱ（心理社会的アセスメントの意味）（実務家教員）（大島） 14. 看護における対象の状態の捉え方Ⅲ（看護診断の学問的位置づけ）（実務家教員）（大島） 15. 看護における対象の状態の捉え方Ⅳ（看護診断の臨床の意味）（実務家教員）（大島） 16. 看護における対象の状態の捉え方Ⅳ（看護診断の臨床における課題）（実務家教員）（大島） 17. 看護に对象に関するプレゼンテーションおよび討論（実務家教員・双方向）（大島） 18. 看護の本質、概念、看護理論、看護の对象に関する研究のクリティークⅠ：プレゼンテーション及び討論（実務家教員・双方向）（大島） 19. 看護の本質、概念、看護理論、看護の对象に関する研究のクリティークⅡ：プレゼンテーション及び討論（実務家教員・双方向）（大島） 20. 看護の本質、概念、看護理論、看護の对象に関する研究のクリティークⅢ：プレゼンテーション及び討論（実務家教員・双方向）（大島） 21. 看護方法論 看護方法論の概念、要素（実務家教員）（大島） 22. 看護方法論 看護方法の研究（実務家教員）（大島） 23. 看護方法論（技術論）看護方法研究のクリティーク視点（実務家教員）（大島） 24. 看護方法論（看護過程）の概念、要素（実務家教員）（大島） 25. 看護方法論（方法論および看護過程を含む）看護方法研究クリティークプレゼンテーションおよび討論Ⅰ（実務家教員・双方向）（大島） 26. 看護方法論（技術論および看護過程を含む）看護技術研究クリティークプレゼンテーションおよび討論Ⅱ（実務家教員・双方向）（大島） 27. 看護方法論（技術論および看護過程を含む）看護技術研究クリティークプレゼンテーションおよび討論Ⅲ（実務家教員・双方向）（大島） 28. 臨床実践における看護の本質、看護理論、看護の对象、看護方法論の研究的意義Ⅰ：討論（実務家教員・双方向）（大島） 29. 臨床実践における看護の本質、看護理論、看護の对象、看護方法論の研究的意義Ⅱ：討論（実務家教員・双方向）（大島） 30. まとめ、現状の課題と研究課題：討論（実務家教員・双方向）（大島） <p>これらの内容について、ゼミ形式で、教授—学修の双方向で進行するため、授業計画は学修者のニーズに合わせて変更する。</p>							
ナンバリング	HSDM5002							

開講年度・開講学期	2020年度 春学期～秋学期		授業コード	512A0			
科目	512A 実践看護技術学特論		授業種別	春学期（週間授業）、秋学期（週間授業）			
担当教員	藤井 徹也		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	看護実践場面における看護行為を取り上げ、その行為を成り立たせている看護技術の原理・原則との関係性と看護技術の可能性を多面的に検討し、新たな看護技術の有効性を検証する方法について学修する。主に、「身体機能を支援するケア」、「フィジカルアセスメント」、「看護コミュニケーション」に関する看護技術を重点的に取り組む。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護実践場面における看護行為と看護技術の原理・原則との関係を構造化し、看護技術がもつ意味を理解できる。 2. 看護技術の開発において、重視しなければならない看護の視点について検討する。 3. 看護技術に必要な計測・測定技術の有効性および具体的な活用方法について、多面的に検討し看護技術開発の有効性を検証する。 						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当） 毎回の授業計画にそって、事前学修、事後学修をして臨むこと						
成績評価	テーマを設定してレポートの提出を求める。提出されたレポート内容と受講態度で総括評価する						
評価項目	割合		評価基準				
レポート	80%		レポート内容の完成度を確認する				
受講態度	20%		主体的学修態度を確認する				
授業の実施方法と授業計画	第 1回 オリエンテーション、学びの希望（実務教員） 第 2回 身体機能を支援するケアの原理と応用①（実務教員） 第 3回 身体機能を支援するケアの原理と応用②（実務教員） 第 4回 身体機能を支援するケアの実際①（実務教員） 第 5回 身体機能を支援するケアの実際②（実務教員） 第 6回 身体機能を支援するケアの課題分析①（実務教員） 第 7回 身体機能を支援するケアの課題分析②（実務教員） 第 8回 身体機能を支援するケアの新たな技術的課題の検証①（実務教員、双方向） 第 9回 身体機能を支援するケアの新たな技術的課題の検証②（実務教員、双方向） 第 10回 身体機能を支援するケアの新たな技術的課題の検証③（実務教員、双方向） 第 11回 フィジカルアセスメントの原理と応用（実務教員） 第 12回 看護におけるフィジカルアセスメントの実際①（実務教員） 第 13回 看護におけるフィジカルアセスメントの実際②（実務教員） 第 14回 看護におけるフィジカルアセスメントの課題分析①（実務教員、双方向） 第 15回 看護におけるフィジカルアセスメントの課題分析②（実務教員、双方向） 第 16回 看護におけるフィジカルアセスメントの新たな技術的課題の検証①（実務教員、双方向） 第 17回 看護におけるフィジカルアセスメントの新たな技術的課題の検証②（実務教員、双方向） 第 18回 看護コミュニケーションの原理と応用（実務教員） 第 19回 看護コミュニケーションの実際①（実務教員、双方向） 第 20回 看護コミュニケーションの実際②（実務教員、双方向） 第 21回 看護コミュニケーションの課題分析①（実務教員、双方向） 第 22回 看護コミュニケーションの課題分析②（実務教員、双方向） 第 23回 看護コミュニケーションの課題分析③（実務教員、双方向） 第 24回 看護コミュニケーションの新たな技術的課題の検証（実務教員、双方向） 第 25回 看護技術開発に有効なデータ解析手法①（実務教員） 第 26回 看護技術開発に有効なデータ解析手法②（実務教員） 第 27回 看護技術に関する論文クリティーク①（実務教員、双方向） 第 28回 看護技術に関する論文クリティーク②（実務教員、双方向） 第 29回 看護技術に関する論文クリティーク③（実務教員、双方向） 第 30回 まとめ、現状の課題と研究課題のディスカッション（実務教員、双方向） 授業内容は、学修進度により変更することがある						
ナンバリング	HSDM5003						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51280			
科目	5128 看護倫理論		授業種別	週間授業			
担当教員	大島 弓子		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	看護倫理の意義とその必要性について哲学的、理論的、社会的な見地から考察でき、「倫理」の概念、本質、原則、倫理的なジレンマについて理解する。同時に、生命倫理の歴史的な背景、変遷と現在の社会的な要請の見地等についても理解する。また、医療および看護場面における倫理的ジレンマについて多様な観点から考察し、看護実践に活用出来るモチベーションを高めると共に、その専門領域に関する具体的な倫理的ジレンマについて、倫理的な調整等、解決策を含めた考察を深める。さらに看護倫理に対する研究的な課題とアプローチおよび看護倫理に関する組織的な取り組みについても理解する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	◎			
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護倫理の意義とその必要性について理論的、社会的な見地から考察できる。 2. 伝統的倫理学と近代的倫理学の概括から理論的基盤に基づき、倫理の「倫理」の概念、原則、倫理的なジレンマについて理解できる。 3. 生命倫理の考え方の歴史的な背景、変遷と現在の社会的な要請の見地から、そのあり様を理解できる。 4. 看護倫理の概念、本質、哲学的な基盤、意義について理解できる。 5. 看護倫理を実践していく上で必要なコンピテンシー、方法について理解できる。 6. 医療および看護場面における倫理的ジレンマについて多様な観点から考察し、看護実践に活用出来るモチベーションを高める。専門看護師をめざすものについては、その領域に関する倫理的なジレンマと倫理的調整等の解決策について考察を深める。 7. 看護倫理に対する研究的な課題とアプローチ、看護倫理に関する組織的な取り組みについて理解できる。 						
テキスト（教科書）	<ol style="list-style-type: none"> 1) サラ T. フライ（片田範子他訳）：看護実践の倫理，第2版，日本看護協会出版会，2009. 2) 日本看護協会監修：新版看護者の基本的責務，日本看護協会出版会，2009. 						
参考書および参考文献	<ol style="list-style-type: none"> 1) Taylor, C. : Fundamentals of Nursing, The Art and Science of Nursing Care, Unit1, 'Values, Ethics, and Advocacy', 7th Edition, Lippincott Williams & Wilks, 2010. 2) 和辻哲郎：人間の学としての倫理学，岩波書店，2000. 他、講義時に紹介 						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	<ol style="list-style-type: none"> ①現在の世界（日本、海外）での状況の複数の新聞やメディアから情報を得て、倫理的な課題と自らが思うことを吟味して考える。複数の情報源を照らし合わせることを必ずすること。 ②ソクラテス、アリストテレス、カント、ベンサムなどの世界の思想史を復習すること。 ③プラグマティズムや功利主義などの考え方はどのようなものか学修すること。 第1回目の授業時に説明する。						
成績評価	レポート、プレゼンテーション内容と討論内容を総合的に評価する						
評価項目	割合	評価基準					
レポート	50%	看護倫理の本質をふまえ倫理的ジレンマの抽出とその分析について、自らの見解を加え適切に論述できることを観点に評価する					
プレゼンテーション内容と討論内容	50%	複数の理論、宗教から倫理の本質についてまとめ、また倫理的ジレンマを抽出してプレゼンテーションできること、また、倫理的観点から自らの考えを述べ、討論できること、これらの視点で評価する					
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1回 学修内容の確認、学修希望、看護倫理に関して体験した問題、感じていること（実務家教員） 2回 看護倫理の意義とその必要性、医療倫理に対する社会からの要請（実務家教員） 3回 伝統的倫理学と近代的倫理学（実務家教員） 4回 「倫理」の概念、倫理の原則、倫理と法律との関係、倫理的なジレンマ（実務家教員） 5回 生命倫理に対する考え方の歴史的な背景、変遷と現在の社会的な要請の見地（実務家教員） 6回 看護倫理の概念、本質、哲学的な基盤、意義（実務家教員） 7回 看護実践における倫理的なコンピテンシー；倫理的な感受性、倫理的判断（実務家教員） 8回 看護実践における倫理的なコンピテンシー；倫理的なジレンマへの調整等アプローチ、アサーション能力（実務家教員） 9回 医療および看護場面における倫理的ジレンマとその対応についての事例の検討（2）（実務家教員・双方向） 10回 医療および看護場面における倫理的ジレンマとその対応についての事例の検討（2）（実務家教員・双方向） 11回 医療および看護場面における倫理的ジレンマとその対応についての事例の検討（3）（実務家教員・双方向） 12回 医療および看護場面における倫理的ジレンマとその対応についての事例のプレゼンテーションと討論（1）（実務家教員・双方向） 13回 医療および看護場面における倫理的ジレンマとその対応についてについてプレゼンテーションと討論（2）（実務家教員・双方向） 14回 看護倫理に対する研究的な課題とアプローチ、研究倫理の取り組み、組織上の取り組み（実務家教員） 15回 看護倫理の今後の課題と取り組み、まとめ（実務家教員） 						
ナンバリング	HSBM5003						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期			授業コード	51290		
科目	5129 看護理論			授業種別	週間授業		
担当教員	大島 弓子			単位数	2		
その他担当者							
授業概要	看護理論および周辺諸理論を体系的に理解し看護実践への活用をめざす。この活用に向けて、看護理論を体系的に概観し、諸理論の変遷と内容的構造及び特徴を理解する。主要な看護理論家の看護モデルについて、その哲学的基盤、概念及び看護の実践/教育/研究への活用について理解する。広範囲理論であるロイ適応理論により、これら理論の実践への活用をより具体的に理解する。また、自ら関心ある領域において、その看護理論及び諸理論の適用の妥当性を考察したうえで、実践/研究/教育への具体的な活用について検討する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	○			
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護理論を体系的に概観し、諸理論の変遷と内容的構造及び特徴を理解できる。 2. 主要な看護理論家の看護モデルについて、その哲学的基盤、概念及び看護の実践/教育/研究への活用について理解できる。 3. 広範囲理論であるロイ適応モデルの理論構築、重要概念及び看護の実践/研究/教育への適用における具体的な活用について理解できる。 4. 自ら関心ある領域において、その看護理論及び諸理論の概括を理解したうえで適用の妥当性を考察して、実践/研究/教育への具体的な活用について検討し、まとめることができる。 						
テキスト（教科書）	特に指定しない。						
参考書および参考文献	<ol style="list-style-type: none"> ①都留伸子監訳：看護理論家とその業績，第3版，医学書院，2009. ②松木光子監訳：ザ・ロイ適応看護モデル第2版，医学書院，2014. ③南裕子，他訳：看護理論集 増補改訂版，日本看護協会出版会，2018. ④上鶴重美監訳：看護学における理論思考の本質，日本看護協会出版会，2003 他、講義時に紹介						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	看護に関連した諸理論及び看護理論に興味関心を持ち、数冊の関連した書物に目を通しておくことが望ましい。思想の歴史についての外観を把握しておく。第1回目の授業時に説明する。						
成績評価	レポート，プレゼンテーション内容とディスカッション状況について総合的に評価する						
評価項目	割合	評価基準					
レポート	50%	取り上げた看護理論の重要概念及び実践・研究に活用する主要な観点から、文献の分析をふまえたうえで、自身の考えで適切にまとめられている、この観点から評価する					
プレゼンテーション内容 とディスカッション内容	50%	複数の理論家の文献購読を背景に、プレゼンテーションとディスカッションに自身の考えをもとに出来る、これを視点に評価する					
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1回 学びの希望、講義の進め方、看護理論/諸理論に関する文献の活用の留意点、看護理論の実践における活用上の課題（実務家教員） 2回 看護理論の哲学的基盤とその発達、看護理論の構造、看護理論の構成要素（実務家教員） 3回 守備範囲、看護理論の分析・評価、看護理論の看護実践/教育/研究への活用、専門的な分野における看護理論の適用とその活用（実務家教員） 4回 看護理論/看護モデルと関連する諸理論（実務家教員） 5回 看護理論/看護モデルの分類とその概括（1） プレゼンテーションと討論（1）（実務家教員・双方向） 6回 看護理論/看護モデルの分類とその概括（2） プレゼンテーションと討論（2）（実務家教員・双方向） 7回 看護理論/看護モデルの分類とその概括（3） プレゼンテーションと討論（3）（実務家教員・双方向） 8回 看護理論/看護モデルの分類とその概括（3） プレゼンテーションと討論（4）（実務家教員・双方向） 9回 広範囲理論の成り立ち、ロイ適応モデル概観、理論構築の背景、哲学的基盤（実務家教員） 10回 ロイ適応モデル重要概念（人間、環境、健康、看護）（実務家教員） 11回 ロイモデル看護過程、看護理論と看護過程との関係および実践への具体的な活用の仕方（実務家教員） 12回 ロイモデル（看護の実践/研究への適用、各専門領域における活用、評価）（実務家教員） 13回 自らの関心ある領域における看護理論及び諸理論の具体的な活用（1）の検討：討論（実務家教員・双方向） 14回 自らの関心ある領域における看護理論及び諸理論の具体的な活用（2）の検討：討論（実務家教員・双方向） 15回 看護理論に対する研究的な課題とアプローチ（実務家教員） 						
ナンバリング	HSBM5004						

開講年度・開講学期	2020 年度 春学期		授業コード	512B0				
科目	512B 周術期看護管理論		授業種別	週間授業				
担当教員	中村 裕美		単位数	2				
その他担当者								
授業概要	侵襲性の高い治療である外科手術における患者の生体反応を理解し、患者の生活の質（QOL）を支える周術期管理の方策に関する専門的知識を学修する。特に高齢者などのハイリスクな患者に対し、他の医療専門職と協働して問題解決を行う看護師の役割を考察し、周術期における看護援助を学修する。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	◎	○	○			
授業の到達目標	①手術侵襲を受ける対象者の生体反応を理解できる。 ②手術を受ける患者の身体・心理・社会的側面をアセスメントし、侵襲を最小限にする看護援助を理解することができる。 ③主要な外科疾患の病態生理を理解し、その最新の外科治療法における看護が説明できる。 ④主要な外科治療法の術前・術中・術後の看護と患者管理を説明できる。 ⑤周術期における看護を採求することができる。							
テキスト（教科書）	日本麻酔科学会（著）：周術期管理チームテキスト第3版，公益社団法人日本麻酔科学会 5,500円，2010. 978-4990526252							
参考書および参考文献	適宜紹介する。							
受講条件	なし							
事前・事後学習（内容・時間）	準備学修については、各授業時に指示する。							
成績評価	レポート（60%）講義内容の理解度を確認する。 プレゼンテーション（40%）講義への取り組み、態度を評価する。							
評価項目	割合		評価基準					
レポート	60%		記述内容の適切性について評価する。					
プレゼンテーション	40%		発表態度・内容の適切性について評価する。					
授業の実施方法と授業計画	第 1 回 周術期看護の現状と課題① 第 2 回 周術期看護の現状と課題②（プレゼンテーション） 第 3 回 手術を受ける患者に対する術前看護（呼吸機能） 第 4 回 手術を受ける患者に対する術前看護（循環機能） 第 5 回 手術を受ける患者に対する術前看護（薬剤管理） 第 6 回 基礎疾患を有する患者の評価 第 7 回 術中看護に関連する課題① 第 8 回 術中看護に関連する課題②（プレゼンテーション） 第 9 回 術後患者管理（呼吸機能） 第 10 回 術後患者管理（循環機能） 第 11 回 術後患者管理（中枢神経） 第 12 回 術後患者管理（疼痛） 第 13 回 術後患者管理（出血） 第 14 回 術後看護に関連する課題（プレゼンテーション） 第 15 回 周術期医療チームにおける看護師の役割の現状と課題（プレゼンテーション）							
ナンバリング								

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	512C0			
科目	512C がん医療社会学論		授業種別	週間授業			
担当教員	大野 裕美		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	がん医療にかかわる問題を社会システムとして捉えることで、がん患者支援のあるべき姿を探究することを目指していく。がんは身体的な苦痛を与えるのみならず、精神・社会・実存的苦痛を与えることはトータルペインに称されるように知られていることである。そのがん患者を支える支援の枠組みを、社会学（政策含む）・看護学・医学等の学際的なフィールドワークから探究することで新たな知見を創出していく。すなわち、がんを社会学のシステムという観点から患者支援の枠組を構築していくことがねらいである。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	◎	○	○	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. がん医療に関する文献を欧文も含めて収集し、その文献を検討することができる。 2. 医療政策におけるがん患者の変遷を説明できる。 3. がん患者に必要な支援の在り方を、医療社会学の観点から説明することができる。 4. がん患者の意思決定支援におけるアドバンスケアプランニングの現状について説明することができる。 5. 自身の研究テーマに照らしてがん患者支援に関するレポートを作成し、発表することができる。 						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	その都度、紹介する。						
受講条件	受講条件は定めないが、英文講読できることが望ましい。（英文講読による発表あり）						
事前・事後学習（内容・時間）	初回の講義で、学修に必要な文献および準備事項等をイントロダクションする。がん医療に関する動向および理論に関する感度を高く持つことが必要である。						
成績評価	研究への取り組み、討議への参加状況により総合的に評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
討議への参加状況（プレゼンテーション含）	40%						
課題レポート	60%						
授業の実施方法と授業計画	<p>第1回：イントロダクション、がんを取り巻く社会的状況（双方向）</p> <p>第2回：がん医療社会学（がんと社会学）の射程（双方向）</p> <p>第3回：がん医療における課題（双方向）</p> <p>第4回：がん医療と看護（双方向）</p> <p>第5回：がん患者支援研究の動向（双方向）</p> <p>第6回：エビデンスとナラティブ（双方向）</p> <p>第7回：がん患者支援における新たな取り組み①ピアサポート（双方向）</p> <p>第8回：がん患者支援における新たな取り組み②サバイバーシップ（双方向）</p> <p>第9回：がん患者支援における新たな取り組み③がん教育（双方向）</p> <p>第10回：がん患者の意思決定支援・アドバンスケアプランニング（双方向）</p> <p>第11回：緩和ケアとエンドオブライフケア（双方向）</p> <p>第12回：がんとタナトロジー（死生）（双方向）</p> <p>第13回：がん医療社会学（がんと社会学）の分析の視点（双方向）</p> <p>第14回：がん医療におけるフィールドワーク技法①（タナトロジーカフェ参加）（双方向）</p> <p>第15回：がん医療社会学討論（双方向）</p> <p>※ゼミ形式で進行していくので、学修者の問題意識に応じて変更する。 フィールドワーク等、学外での学修も予定している。</p>						
ナンバリング							

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	512D0			
科目	512D 老年看護援助論		授業種別	週間授業			
担当教員	山根 友絵		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	老年期の発達課題や、加齢に伴う身体・心理・社会面の変化、高齢者とその家族を理解するための諸理論、およびサポートシステムの動向について学び、高齢者の特性に応じた看護実践について理解を深める。また、老年看護に関する研究の動向から、老年看護実践における課題を検討する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	○			
授業の到達目標	①老年看護に関する主要な概念や理論を理解し、実践への活用について自己の考えを述べることができる。 ②高齢者とその家族を支えるサポートシステムの現状と課題を説明できる。 ③老年看護に関する研究の動向を整理し、老年看護実践における課題を述べるができる。						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	授業計画に沿って、関連する文献を読み、整理しておく（各回4時間程度）。プレゼンテーションについては、事前に資料作成の準備を行い、事後に不足部分を追加工修する（4時間程度）。						
成績評価	プレゼンテーションおよび討議への参加、課題レポートにて総合的に評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
プレゼンテーションおよび討議への参加度	40%		テーマに沿った内容のプレゼンテーションができ、討議に積極的に参加できたかで評価する				
課題レポート	60%		適切な文献を活用し、自分の考えが論理的に記述できているかで評価する。				
授業の実施方法と授業計画	第1回 オリエンテーション、学生の関心のあるテーマについて（実務家教員） 第2回 老年期の発達課題、加齢に伴う変化（実務家教員） 第3回 高齢者を取り巻く保健医療福祉制度の変遷（実務家教員） 第4回 高齢者とその家族を支えるサポートシステムの現状と課題（実務家教員） 第5回 老年看護実践に適用可能な理論・概念①（実務家教員） （QOL、エンパワーメント、ストレングス、コンフォート等） 第6回 老年看護実践に適用可能な理論・概念②（学生によるプレゼンテーション）（実務家教員） 第7回 認知症高齢者への支援と課題①（実務家教員） （パーソン・センタード・ケア、ユマニチュード等） 第8回 認知症高齢者への支援と課題②（学生によるプレゼンテーション）（実務家教員） 第9回 認知症高齢者への支援と課題③（実務家教員） 第10回 エンド・オブ・ライフ期の支援と課題①（実務家教員） 第11回 エンド・オブ・ライフ期の支援と課題②（学生によるプレゼンテーション）（実務家教員） 第12回 老年看護に関する研究の動向と課題①（実務家教員） 第13回 老年看護に関する研究の動向と課題②（実務家教員） 第14回 老年看護に関する研究の動向と課題③（学生によるプレゼンテーション）（実務家教員） 第15回 まとめ（実務家教員） ただし、受講学生の習熟度により授業計画を変更することもある。						
ナンバリング							

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51310			
科目	5131 適応生理学論		授業種別	週間授業			
担当教員	後藤 勝正		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	生体諸機能は、種々の刺激（ストレス）を受容し、それに応答・適応する。さらに、発育・発達・成熟・老化や様々な疾病・疾患により生体の機能は大きく変容する。本講義では、生活の質（Quality of Life）や健康の維持増進において主要な臓器である骨格筋を対象に、様々な刺激（ストレス）に対する生体応答と適応機構に関する知識および予防医学から運動、疲労、休養など多角的な視点から健康を取り巻く総合的な知識を修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	◎			
授業の到達目標	<p>本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」、「研究領域に関連する知見を尊重する姿勢と新たな課題を探究する意欲を持ち、研究領域に関連する知識に関心を持つ」、「人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につける」ことを目指す。そのために、以下の到達目標を設定する。</p> <p>①細胞外刺激とその応答について、細胞内シグナル伝達から説明できる。 ②骨格筋、骨、心筋細胞、消化吸収機能の適応について説明できる。 ③骨格筋の可塑性とその仕組みを説明できる。 ④種々の環境に対する生体機能の適応を説明できる。 ⑤老化に伴う生体機能の変化を説明できる。</p>						
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。						
参考書および参考文献	参考書：その都度、紹介する。						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（2時間程度×14回）。第1回目の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。準備学習や授業外学修事項については、必要に応じて授業中に指示する。						
成績評価	レポートあるいは口頭試問：抄読した文献や演習内容についての基本的事項（60%）、発展・応用問題（40%） 評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートあるいは口頭試問	100%		テーマに対する適切な内容を調べ、質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>設定したテーマについてゼミナール形式で授業を展開する。</p> <p>第1回（講義・演習）細胞外刺激と細胞応答（双方向） 第2回（講義・演習）細胞内シグナル伝達と細胞応答（双方向） 第3回（講義・演習）骨格筋の適応①（肥大を引き起こす要因）（双方向） 第4回（講義・演習）骨格筋の適応②（萎縮を引き起こす要因）（双方向） 第5回（講義・演習）骨格筋の疲労とその回復（双方向） 第6回（講義・演習）骨格筋の損傷と適応（双方向） 第7回（講義・演習）骨格筋の再生とそれに影響を及ぼす因子（双方向） 第8回（講義・演習）骨形成と骨吸収に及ぼす要因（双方向） 第9回（講義・演習）心筋細胞の収縮とエネルギー代謝（双方向） 第10回（講義・演習）消化吸収と身体活動（双方向） 第11回（講義・演習）骨格筋可塑性と筋衛星細胞（双方向） 第12回（講義・演習）運動・トレーニングによる生体機能の適応（双方向） 第13回（講義・演習）重力・宇宙環境と生体機能（双方向） 第14回（講義・演習）老化に伴う生体機能の変化とその対抗策（双方向） 第15回（講義・演習）骨格筋と組織幹細胞（双方向）</p> <p>学生に疑問や質問を投げかけ、学生からの回答に対してさらに答えるなどというやり取りをしながら、ゼミナール形式で授業を行う。 レポートなどの課題については、授業内・授業時間外で質問を常時受け、疑問に対する回答などフィードバックを行う。 受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。</p>						
ナンバリング	HSEM5001						

開講年度・開講学期	2020 年度 春学期		授業コード	51320			
科目	5132 医療統計論		授業種別	週間授業			
担当教員	中川 博文		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	健康科学領域における統計処理で基礎となる問題の理解を深める。リハビリテーション学領域および看護学領域のデータ処理は、基礎的な統計手法だけではカバーしきれないことも多い。基礎的な統計学を中心に、並行してコンピュータの進歩とともに広がってきた新しい手法も取り上げながら健康科学関連データの処理について学習する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	○				○		
授業の到達目標	①正規分布の特徴について説明できる。 ②標準正規分布表を用いて確率値を求めることができる。 ③t分布表を用いた2群間の有意差の検定ができる。 ④等分散性の検定ができる。 ⑤2変量及び多変量データから単回帰式や重回帰式を導き、その式について説明ができる。 ⑥相関係数および偏相関係数を求め、その値の説明ができる。 ⑦一元配置および二元配置の分散分析ができる。 ⑧統計試験に必要な標本サイズの大きさを設定することができる。 ⑨臨床試験の組み立て方について説明できる。 ⑩臨床試験の種類や方法等について説明できる。						
テキスト（教科書）	受講の際に、適宜、資料を配布する						
参考書および参考文献	「医学統計学」第5刷 宮原英夫・白鷹増男 共著（朝倉書店：ISBN4-254-12085-0） 論文作成のための統計手法を、ごく初歩から学習したい学生は ・統計学入門 小島寛之 ダイアモンド社 2006 ・分散分析のはなし 石村貞夫 東京図書 1992						
受講条件	特になし。						
事前・事後学習（内容・時間）	毎回の授業について、予習・復習等の自己学習（学習時間；4時間相当）を必ず行うこと。 ・授業内容は事前に資料等で確認しておくこと。（第2～第14回／2時間相当） ・授業で扱った数式や数値データ等は自身で必ずチェックしておくこと。また、演習で取り扱った内容は繰り返し練習を行い、確実にできるようにしておくこと。（第1～第15回／2時間相当）						
成績評価	課題レポート：授業で実施した模擬データの統計解析結果をレポートにまとめて提出してもらう。レポートは紹介したデータの統計解析法を応用し、得られた結果に対する考察等のでき具合により評価する。 なお、遅刻、早退、欠席および劣悪な授業態度は減点の対象となる場合がある。						
評価項目	割合		評価基準				
レポート課題	100%		レポートの評価基準は最高点を100点とし、S：90点以上、A：80点以上90点未満、B：70点以上80点未満、C：60点以上70点未満、D：59点未満とする。				
授業の実施方法と授業計画	設定したテーマについてゼミナール形式で授業を展開する。 第1回 基本統計量（1）（双方向） 第2回 基本統計量（2）（双方向） 第3回 正規分布（1）正規分布の特徴（双方向） 第4回 正規分布（2）正規分布データの解析（双方向） 第5回 有意性検定（双方向） 第6回 分割表の検定（1）（双方向） 第7回 分割表の検定（2）（双方向） 第8回 相関係数と線形回帰式（双方向） 第9回 重回帰分析（双方向） 第10回 ロジスティック回帰（双方向） 第11回 カプラン・マイヤー法と生存曲線（双方向） 第12回 ログランク検定（双方向） 第13回 標本サイズ（双方向） 第14回 臨床試験（1）臨床試験の基礎（双方向） 第15回 臨床試験（2）臨床試験の種類と実際（双方向） ただし、受講学生の習熟度により授業計画を変更することもある。授業中に課したレポート課題については次回授業の際に解説を行う。						
ナンバリング	HSEM5008						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51330			
科目	5133 生体構造論		授業種別	週間授業			
担当教員	肥田 岳彦		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	細胞、組織、中空性器官および実質性器官の基本的構造および特異的構造について学習し、各器官各部の機能との関連性、組織・器官形成と個体の左右対称性・非対称性との関連性について考察する。基本要素である細胞の生体膜系分子構築と超微構造、細胞の形態維持と細胞運動に関連する構造、細胞レベルの情報伝達系および器官・個体レベルの構造と情報伝達系について解説する。さらに、形態形成関連遺伝子とそれらの発現機構、立体構造の構築過程とその制御機構、細胞・組織・器官レベルでの機械的情報および4次元情報の受容と処理に関する機構解明の現状について運動器系を中心に解説し、生体構造の形成・維持の制御機構解明の方法論の問題点を討論・考察する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 細胞内構造物および組織の特異的構造と機能との関連を説明できる。 2. 中空性器官および実質性器官の基本構造と特異的構造・機能が説明できる。 3. 器官系の左右対称性・非対称性と器官系発生との関連性について説明できる。 4. DNAの構造と機能について説明できる。 5. 形態形成に関与するDNA群について説明できる。 6. 細胞、器官各部、個体レベルの情報伝達・処理系について説明できる。 7. 運動器および神経系の形態形成と構造維持について説明できる。 8. 現在における4次元情報の処理および構造の形成・維持の制御解析法の問題点について考察する。 						
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。 参考書および論文：その都度、紹介する。						
参考書および参考文献	論文を適宜紹介する。						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	適宜指示する。						
成績評価	テーマを設定してレポートの提出を求める。レポートおよび討論により総括評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
定期試験	80%		筆記試験にて講義内容の理解度を確認する（基礎問題80%、応用問題20%）。				
課題レポート	20%		課題に対する適切な内容・記述になっているかを確認・評価する。				
授業の実施方法と授業計画	第1回 細胞の構造（1）細胞生体膜の構造 第2回 細胞の構造（2）細胞内構造物の形態・機能 第3回 組織の構造 第4回 中空性器官の構造と機能 第5回 実質性器官の構造と機能 第6回 器官系発生と器官系の対称性・非対称性 第7回 細胞、器官および個体レベルの情報伝達系 第8回 4次元構造の情報と細胞の反応 （1）情報受容部位の構造と反応 第9回 3次元構造の情報と細胞の反応 （2）細胞培養系における組織の3次元構築 第10回 物理的情報に対する細胞・組織の反応 （1）骨系細胞・組織の反応 第11回 物理的情報に対する細胞・組織の反応 （2）筋系細胞・組織の反応 第12回 神経系の形態形成と構造維持 第13回 形態形成の遺伝子（1）体軸形成と遺伝子 第14回 遺伝子の発現およびオルガナイザー 第15回 生体構造制御における四次元情報解析の方法論の現状						
ナンバリング	HSEM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51340			
科目	5134 研究論		授業種別	週間授業			
担当教員	金井 章		単位数	2			
その他担当者	蒔田 寛子、藤井 徹也、加藤 知佳子、肥田 岳彦						
授業概要	社会調査、実験的研究、疫学研究および質的研究の各種研究の持つ意味と目的を正しく理解するとともに、実際の研究を通して現状や問題点の把握、研究計画の立案、解決方策の探求ならびに課題のまとめ方を理論的に遂行する方法について学修する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎		○		○		
授業の到達目標	各種研究の持つ意味と目的を正しく理解し、実践する能力を修得するするため、到達目標を以下の通りとした。 ①社会調査の手法に関して説明できる。 ②リハビリテーション領域における実験的研究に関して説明できる。 ③看護領域における実験的研究に関して説明できる。 ④質的研究に関して説明できる。						
テキスト（教科書）	テキスト：特に設定しない。						
参考書および参考文献	参考書：その都度、紹介する。						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当） 1. 今までに自分が行った研究の手法について整理しておくこと 2. 各分野における論文を読み、研究手法について確認しておくこと 3. 講義で学んだ研究手法について整理し、まとめておくこと						
成績評価	適宜、テーマを設定してレポートの提出、発表、討議を行い、その内容をもとに評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートまたは発表	100%		テーマについて適切にまとめて報告し、質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>（金井 章）</p> <p>第1回 （講義）実験的研究とその実際（リハビリテーション研究①）（実務家教員）</p> <p>第2回 （講義）実験的研究とその実際（リハビリテーション研究②）（実務家教員）</p> <p>（加藤知佳子）</p> <p>第3回 （講義）社会調査の概要</p> <p>第4回 （講義・演習）社会調査の実際（ディスカッション）（双方向）</p> <p>第5回 （演習）調査票・質問紙の作成（双方向）</p> <p>第6回 （演習）調査票・質問紙によるデータ収集と分析（プレゼンテーション・ディスカッション）（双方向）</p> <p>（松本 尚子）</p> <p>第7回 （講義）実験的研究とその実際（看護研究①）（実務家教員）</p> <p>第8回 （講義）実験的研究とその実際（看護研究②）（実務家教員）</p> <p>（蒔田 寛子）</p> <p>第9回 （講義）質的研究の基礎（質的研究とは 質的研究のプロセス）（実務家教員）</p> <p>第10回 （講義）質的研究における倫理的配慮 質的データの収集（質的面接法、フォーカスグループ、観察法）（実務家教員）</p> <p>第11回 （演習）主な質的研究と研究手法（質的記述的研究、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー）（実務家教員・双方向）</p> <p>（加藤知佳子）</p> <p>第12回 （講義）行動分析学の基礎</p> <p>第13回 （講義）行動分析学的研究のデザイン</p> <p>第14回 （講義・演習）行動分析学的研究の実際（双方向）</p> <p>第15回 （講義・演習）行動分析学的データの収集と分析（プレゼンテーション・ディスカッション）（双方向）</p> <p>*それぞれ、課題については授業内で質疑に対するフィードバックを行う *ただし、受講学生の習熟度により授業計画を変更することがある</p>						
ナンバリング	HSEM5003						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51350			
科目	5135 対人コミュニケーション論		授業種別	週間授業			
担当教員	加藤 知佳子		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	<p>私たち人間は、他のモノから同種の仲間であるヒトを峻別し、ヒトならではのコミュニケーションを行う。その過程には、視線、顔、音調などの非言語的情報だけでなく、音声言語・文字などの言語的情報によるものなど、さまざまな様式の情報処理過程を含む。その発達と障害・病態およびその脳内処理過程について、最新の知見も踏まえて講義するとともに、社会の人々の精神的健康を支援・増進するという立場から、現代社会における対人コミュニケーションの重要性と問題点について検討を行う。</p>						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	○	○		◎			
授業の到達目標	<p>①コミュニケーションの構成要素を説明できる。 ②対人間でやりとりされる情報を列挙できる。 ③対人間でやりとりされる情報の発信と解釈に関する発達、性差、年齢差、文化差等について、説明できる。 ④対人コミュニケーションにかかわる障害およびその脳内過程について説明できる。 ⑤コミュニケーションそのものに関する問題とコミュニケーションを通して介入できる問題とを区別できる。 ⑥対人コミュニケーションに関して発生しやすい具体的な事例に対して、解決に向けて介入するための何らかの提案ができる。</p>						
テキスト（教科書）	第1回の授業で指示する。						
参考書および参考文献	『ヒトらしさとは何か ヴァーチャルリアリティ時代の心理学』（北原他編著 北大路書房） ISBN-13: 978-4762820519						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	<p>予習・復習の内容（4時間相当）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業で検討したい事例やケースについて、可能な限り準備しておく。 ・指定されたテーマについての論文をあらかじめ読んでおく。 ・学んだこと、気づいたことについて、レポートにまとめておく。 						
成績評価	授業の到達目標に関する達成度によって評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
文献講読・討議への参加	40%		自発的、積極的な事前準備および討議に関する貢献度に応じて評価する。				
課題レポート	60%		課題に対する適切な内容・記述になっているかを評価する。課題レポートの提出・コメント等は、Universal Passportの機能を活用して行う。				
授業の実施方法と授業計画	<p>設定したテーマについてゼミナール形式で授業を展開する。</p> <p>第1回 はじめに：コミュニケーションにおけるヒトとモノの相違（双方向） 第2回 対人コミュニケーションが進化した背景（双方向） 第3回 ヒト刺激によるコミュニケーション1：視覚的情報（視線、表情、仕草など）（双方向） 第4回 ヒト刺激によるコミュニケーション2：聴覚その他のモダリティによる情報（音調、身体接触など）（双方向） 第5回 ヒトがつくった刺激を介したコミュニケーション：言語的・非言語的情報（文字、視覚的シンボルなど）（双方向） 第6回 対人コミュニケーションの動機：他者との認識の共有および他者の操作（双方向） 第7回 対人コミュニケーションの発達1：誕生から成人まで（双方向） 第8回 対人コミュニケーションの発達2：高齢者の場合（双方向） 第9回 対人コミュニケーションの個人差1：性格・気質による違い（双方向） 第10回 対人コミュニケーションの個人差2：相貌との関係（双方向） 第11回 対人コミュニケーションの性差（双方向） 第12回 対人コミュニケーションの障害と脳内過程：広汎性発達障害とは（双方向） 第13回 ケーススタディ1：対個人の場合（医療スタッフ間、医療スタッフと患者およびその家族とのコミュニケーション）（双方向） 第14回 ケーススタディ2：対集団の場合（地域社会あるいは特定の病気や年齢層の人々とのコミュニケーション）（双方向） 第15回 まとめ：現代社会における対人コミュニケーションの様相（双方向）</p> <p>ただし、受講学生の専門分野および習熟度により授業計画を変更することもある。</p>						
ナンバリング	HSEM5009						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51380				
科目	5138 コンサルテーション論		授業種別	週間授業				
担当教員	桂川 純子		単位数	2				
その他担当者								
授業概要	<p>専門家が自らの専門に関する援助を提供する場合、その分野に関する十分な知識と技術のみならず、援助関係を構築するという哲学や技術を必要とする。本科目では、この「援助関係」について、コンサルテーションの視点から具体的に考察し、検討する。これにより、高度医療専門職者として相談、調整、指導、倫理の機能を果たす基盤を養う。</p>							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	○			
授業の到達目標	<p>1. コンサルテーションの基本的概念、理論について述べられる。 2. コンサルテーションのプロセス、活動の方法を踏まえたコンサルタントとしての基本的な態度について述べられる。 3. 高度専門職者として援助の人間関係を構築するための具体的方法について述べられる。 4. 具体的な個人、グループ、組織へのコンサルテーションについて、分析できる。</p>							
テキスト（教科書）	指定しない							
参考書および参考文献	<p>・E.H. シャイン（稲葉 元吉、尾川 丈一訳）（2012）プロセス・コンサルテーションー援助関係を築くこと、白桃書房、（2012/11/2）ISBN-13: 978-4561131403 ・アントン・オブホルツァー、ヴェガ・ザジェ・ロバーツ編（武井 麻子、榊 恵子他訳）（2014）組織のストレスとコンサルテーションー対人援助サービスと職場の無意識、金剛出版、ISBN-13: 978-4772413572</p> <p>その他、講義内で適宜紹介する。</p>							
受講条件								
事前・事後学習（内容・時間）								
成績評価	レポート、討議への参加状況について総合的に評価する。							
評価項目	割合		評価基準					
レポート	50%		適切な引用文献を用いて、課題に沿ったレポートを、適切な日本語表現により論述できているかどうかに応じて評価する。					
討議への参加状況	50%		主体的な事前準備に基づいた討議への貢献に応じて評価する。					
授業の実施方法と授業計画	<p>第1回 コンサルテーションとは（実務家教員） 第2～4回 コンサルテーションに関わる理論；個人、グループ、組織の心理・社会的背景（実務家教員） 第5回 コンサルタントとコンサルティとの関係性（実務家教員） 第6回 コンサルテーションのプロセス（実務家教員） 第7～9回 コンサルテーションの技法；カウンセリングマインド、積極的質問と聞き取り、対話（実務家教員） 第10回 コンサルテーションの評価（実務家教員） 第11回 グループコンサルテーション（実務家教員） 第12回 組織へのコンサルテーション（実務家教員） 第13・14回 コンサルテーションの実際：事例検討（実務家教員・双方向） 第15回 コンサルテーションの実際：まとめ（実務家教員・双方向）</p> <p>※受講学生の専門領域や習熟度によって授業計画を変更することがある。</p>							
ナンバリング								

開講年度・開講学期	2020年度 春学期			授業コード	51390		
科目	5139 老年期地域健康支援論			授業種別	週間授業		
担当教員	石田 和人			単位数	2		
その他担当者							
授業概要	地域包括ケアシステムの構築が進む中、老年期の健康支援および健康寿命の延伸は必須の課題である。本授業では、高齢者を対象とした健康づくりや自立生活を目指す医療関連職としての素養を育てることを目的とする。その取り組みとして、まずは老年期地域生活者の健康に関する実態を知り、介入手段の例について学ぶ。さらには、多職種連携を念頭においた具体的な事例検討を通じてその理解を深める。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	◎			
授業の到達目標	①老年期の健康問題を整理し、説明することができる。 ②老年期の健康維持増進について具体的方策を説明することができる。 ③多職種連携・協働の意義を認識し各専門職の立場で議論ができる。 ④これからの地域健康支援について考察し説明することができる。						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	適宜、文献を紹介する						
受講条件	特になし						
事前・事後学習（内容・時間）	事前配布の資料精読、担当課題の遂行と発表準備、ディスカッション内容のまとめ（適宜、1～3時間程度の予習復習が必要）						
成績評価	講義および論文抄読の理解度、課題の遂行状況、レポート等総合的に評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
課題レポート（演習およびプレゼンテーション）	30%		適宜、課す課題レポート等に対する的確に対応し、理解されていることを確認する。				
課題のまとめ発表	30%		テーマに対する適切な内容を調べ、質問に対して適切に回答できるか確認する。				
口頭試問、ディスカッションの際の発言内容、態度等	40%		参加態度の積極性を評定				
授業の実施方法と授業計画	<p><第Ⅰ部>老年期の健康問題 第1回 老年期地域健康支援の社会的動向（実務家教員） 第2回 老年期地域健康支援のこれから（実務家教員） 第3回 老年期地域健康支援の取り組み（実務家教員）</p> <p><第Ⅱ部>最新のエビデンスから老年期の健康を考える 第4回 フレイルと健康対策（実務家教員） 第5回 認知症と健康対策（実務家教員） 第6回 抑うつと健康対策（実務家教員） 第7回 脳卒中と健康対策（実務家教員）</p> <p><第Ⅲ部>海外に学ぶ老年期地域健康支援論 第8回 タイのヘルスケアシステム（実務家教員） 第9回 海外におけるのヘルスケアシステム①（実務家教員） 第10回 海外におけるのヘルスケアシステム②（実務家教員）</p> <p><第Ⅳ部>地域健康支援と多職種連携の実際（施設見学を通して学ぶ） 第11回 地域における医療福祉の展開（実務家教員） 第12回 小規模多機能型居宅介護におけるケアの実際（実務家教員） 第13回 在宅リハビリテーションとケースケア会議の実際（実務家教員） 第14回 地域における医療及び健康づくりの新展開（実務家教員） 第15回 地域健康支援についての総合討論と総括（実務家教員）</p> <p>ゼミナール形式およびグループ討議を主とした形態で授業を勤める。 受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。</p>						
ナンバリング	HSEM5005						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	513C0				
科目	513C 神経科学健康論		授業種別	週間授業				
担当教員	石田 和人		単位数	2				
その他担当者								
授業概要	人々の健康問題を神経科学の視点で見直し、予防やリハビリテーションが貢献しうる可能性について考える機会とする。本授業では、脳卒中をはじめとした中枢神経障害に加え、認知症や抑うつなどの精神障害にも着目し、現代のストレス社会を生きる我々の健康問題について再考する機会とする。特に、神経科学の目覚ましい進歩をベースに健康論を展開することにより、科学的根拠に基づく思考ができるようになることを目的とする。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	◎				
授業の到達目標	本授業では、神経科学の知見に基づいた健康論を展開する。既存の知識のみならず、常に新しい知見を追求しながら、人々の健康実践に寄与しうる健康論へと展開する過程を経験しながら、科学的な目で健康を考えられる素養を身に着ける。具体的には、 ①脳の働きと、運動、食事、睡眠、ストレスなどとの関係を説明できる。 ②脳血管障害など脳損傷の病態とその回復に関する知見を持つ。 ③抑うつを病態生理学的に理解して、その改善策を模索できる。 ④自律神経機能、疼痛、生体リズムなどについて理解を深める。							
テキスト（教科書）	特に設定しないが、必要に応じて参考書および参考資料を提示する。							
参考書および参考文献	適宜、参考文献を紹介する							
受講条件	特になし							
事前・事後学習（内容・時間）	授業の進行によっては、受講者の課題を課して、その内容をまとめ、発表して頂くことがある（その場合は、2～3時間の準備が必要）。また、各授業で話題とした内容については適宜、復習して理解を深めて頂く（書く時間程度）。							
成績評価	レポート：本授業内容に関連した課題レポートを課す。 詳細については、初回授業の際に説明する。							
評価項目	割合		評価基準					
課題レポート	60%		本授業科目の関連したレポートを課す。これにより、学習成果や理解度を評価する。					
出席態度および積極性	40%		授業での質問、態度、積極性などを評価する。					
授業の実施方法と授業計画	<p>設定したテーマについてゼミナール形式で授業を展開する。</p> <p>第 1 回 脳と健康に関する概論（実務家教員） 第 2 回 運動と脳①（基礎編）（実務家教員） 第 3 回 運動と脳②（応用編）（実務家教員） 第 4 回 抑うつに対する運動の効果（実務家教員） 第 5 回 プレゼンテーション A ①（実務家教員） 第 6 回 プレゼンテーション A ②（実務家教員） 第 7 回 食事と脳（実務家教員） 第 8 回 睡眠と脳（実務家教員） 第 9 回 ストレスと脳（実務家教員） 第 10 回 アルコールと脳（実務家教員） 第 11 回 プレゼンテーション B ①（実務家教員） 第 12 回 プレゼンテーション B ②（実務家教員） 第 13 回 抑うつに対する呼吸法と生体リズム（実務家教員） 第 14 回 神経根障害と捉えられる病態と治療（実務家教員） 第 15 回 神経科学健康論の総合討論（実務家教員）</p> <p>学生に疑問や質問を投げかけ、学生からの回答に対してさらに答えるなどというやり取りをしながら、ゼミナール形式で授業を行う。レポートなどの課題については、授業内・授業時間外で質問を常時受け、疑問に対する回答などフィードバックを行う。受講学生の専門領域や習熟度によって学習内容を変更することがある。</p>							
ナンバリング	HSEM5006							

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	513D0			
科目	513D 身体運動解析論		授業種別	週間授業			
担当教員	富田 秀仁		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	<p>ヒトの身体運動を分析することは、運動障害を扱う理学療法士にとって重要な臨床過程の一つである。近年の計測機器や計測手法の進歩とともに、身体運動を詳細に計測し分析することが可能となっている。また、計測結果を客観的かつ詳細に、また迅速に解析するには、プログラミングや統計解析の知識も必要になる。</p> <p>そこで、本授業では、まず身体運動の計測法との解析法を実際の測定と解析を行いながら学ぶ。次に身体運動の解析でよく用いられる Matlab のプログラミングの基礎を学ぶ。最後に分析結果を統計的に処理する際の注意点を学ぶことで、身体運動の解析についての一連の流れを習得する。</p>						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	◎	◎			
授業の到達目標	<p>① 身体運動解析の基礎事項について説明できる。</p> <p>② 身体運動の測定機器の特性や計測原理、測定における注意点を説明できる。</p> <p>③ 身体運動の測定項目に応じた解析方法を説明し、実践できる。</p> <p>④ プログラミングを用いて基本的な解析を行える。</p> <p>⑤ データの解釈に対し適切な統計手法を選択することができる。</p>						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	<p>予習・復習の内容（4時間相当）</p> <p>1. ヒトの身体運動について理解するための基礎となる、解剖学や生理学、運動学を再学習しておくこと。</p> <p>2. 講義で学んだ内容について、その都度復習を行うこと。</p>						
成績評価	レポートや総合討論から総括評価する。評価の詳細については第1回の授業時に説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
レポートあるいは口頭試問	100%		測定と解析法について、質問に対し適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>第1回 身体運動解析総論（実務家教員）</p> <p>第2回 運動解析に必要な基礎知識（実務家教員）</p> <p>第3回 筋電図の計測（実務家教員）（双方向）</p> <p>第4回 筋電図の解析（実務家教員）（双方向）</p> <p>第5回 床反力の計測（実務家教員）（双方向）</p> <p>第6回 床反力の解析（実務家教員）（双方向）</p> <p>第7回 三次元動作解析の計測（実務家教員）（双方向）</p> <p>第8回 三次元動作解析の解析（実務家教員）（双方向）</p> <p>第9回 それ以外の身体運動計測法（実務家教員）（双方向）</p> <p>第10回 種々の身体運動計測の組み合わせ（実務家教員）（双方向）</p> <p>第11回 Matlab を用いたプログラミングの基礎知識（実務家教員）</p> <p>第12回 Matlab を用いた身体運動データの解析（1）（実務家教員）（双方向）</p> <p>第13回 Matlab を用いた身体運動データの解析（2）（実務家教員）（双方向）</p> <p>第14回 統計解析法の選択（1）（実務家教員）</p> <p>第15回 統計解析法の選択（2）（実務家教員）</p> <p>※授業計画は、受講学生の習得度や専門領域によって変更することがある。</p>						
ナンバリング	HSEM5007						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51411			
科目	5141 健康科学特別研究Ⅰ		授業種別	週間授業			
担当教員	後藤 勝正		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	<p>生体は、種々の刺激（ストレス）を受容し、それに応答・適応する。さらに、発育・発達・成熟・老化や様々な疾病・疾患により生体の機能は大きく変容する。本特別研究では、骨格筋を主たるターゲットとし、骨格筋機能に関連する様々な生体機能とそれらに影響を与える因子を探究すると共に、生活の質（Quality of Life）や健康を維持増進していくために必要な生体応答に関する総合的な課題についての研究指導を行う。実際の研究活動を通して、生体機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能に関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法を選択し、関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を健康科学特別研究ⅡからⅢへと順次展開する。</p>						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<p>本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」、「人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につける」、「自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現する」ことを目指す。そのために以下の到達目標を設定する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 ②適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 ③研究を実施できる。 ④結果の吟味と考察できる。 ⑤修士論文を作成できる。 ⑥研究成果を発表し、討論できる。 						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	その都度、紹介する。						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	<p>課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（2時間程度×14回）。第1回の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。準備学習や授業外学修事項については、必要に応じて授業中に指示する。</p>						
成績評価	研究への取り組み、修士論文作成へ向けた進捗状況および総合討論から総括評価する。評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
進捗状況報告	50%		課題解決へ向けて、調査・実験計画が適切か確認する。				
総合討論	50%		質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という一連の研究過程を通して、学位論文作成を目指す。課題の探求、実験計画の立案、実験結果の吟味、学位論文の作成は、ゼミナール形式によるグループディスカッションを中心に行い、必要に応じて個別指導など学生の進捗状況に合わせて行う。（双方向）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○骨格筋機能の生理的・形態的評価 ○各種細胞外刺激と骨格筋の生理的・形態的適応 ○骨格筋損傷と再生 ○骨格筋機能とリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— ○骨格筋可塑性と遺伝子発現 ○骨格筋可塑性と筋衛星細胞 ○宇宙環境と生体機能の適応 ○特殊環境と生体機能の応答 ○骨格筋機能と生体機能との関係 ○生体諸機能の評価法の探求 ○QOLと生体機能 ○生体機能のリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— <p>以上のテーマならびに関連領域の課題について、実験を通して仮説を検証し、研究を健康科学特別研究ⅡおよびⅢと順次展開して、学位論文作成を目指す。</p>						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51412			
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業			
担当教員	金井 章		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	人は、日常生活において、立つ、座る、歩く、などの各動作を繰り返し行っている。健康生活の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、3次元運動解析技術を用いて各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究を計画、実施できるよう、以下の到達目標を設定する。 1. 関連する先行研究をまとめることができる 2. 適切な研究目的が設定できる 3. 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	その都度紹介する						
受講条件	特に無い						
事前・事後学習（内容・時間）	解剖学・生理学・運動学と動作分析手法について復習しておくこと（第1回～15回/60分程度） 2. ヒトの動作分析に係わる文献を読み、まとめておくこと（第1回～15回/60分程度） 3. 研究手法について吟味し、適切に実施できるか予備的な実験を行うこと（第1回～15回/120分程度）						
成績評価	研究への取り組み（30%）、文献抄読（30%）および総合討論（40%）から総括評価する						
評価項目	割合		評価基準				
研究計画状況	30%		テーマに対応した適切な研究の計画が立案されていることを確認する				
文献抄読	30%		テーマに対応した適切な文献を読み、まとめられているかを確認する				
総合討論	40%		テーマについて十分な吟味を行い、質問に対して適切に回答できるかを確認する				
授業の実施方法と授業計画	以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の検討を行う。 なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。（実務家教員） ○姿勢と動作の生体力学的検討 ○歩行の生体力学的検討 ○運動による関節ストレスの検討 ○動作と筋活動応答 ○シミュレーションによる障がい予測と予防 ○老化に伴う跨ぎと階段昇降動作の適応 ○転倒予防システムの開発 ○関節ストレス軽減装具の開発 ○運動機能回復リハビリテーションシステムの開発 ○運動機能のリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— * 授業内で適宜、質問や疑問に対するフィードバックを行なっていく。						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51413				
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業				
担当教員	肥田 岳彦		単位数	2				
その他担当者								
授業概要	人は、日常生活において、立つ、座る、歩く、などの各動作を繰り返し行っている。健康生活の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、3次元運動解析技術を用いて各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。							
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5			
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎			
授業の到達目標	1. 関連する先行研究をまとめることができる 2. 適切な研究目的が設定できる 3. 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる							
テキスト（教科書）	特に設定しない							
参考書および参考文献	その都度紹介する							
受講条件	特に無い							
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当） 解剖学・生理学・運動学と動作分析手法について復習しておくこと。							
成績評価	研究への取り組み、文献抄読および総合討論から総括評価する							
評価項目	割合		評価基準					
研究への取り組み姿勢	90%		研究への積極的な取り組み姿勢で評価する。					
論文抄読による内容把握	10%		論文内容の把握の程度で評価する。					
授業の実施方法と授業計画	以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の検討を行う。 なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。（双方向） ○姿勢と動作に関する運動器の形態的検討 ○歩行動作検討 ○運動による関節構造とそれぞれの形態学的特徴 ○骨格筋の種類と組織学的構造 ○骨格筋の種類と組織学的構造（電子顕微鏡による解析） ○骨格筋の分子生物学的構造 ○骨格筋に分布する神経の基本的構造 ○神経系の伝達経路（シナプスの構造と種類） ○神経伝達物質の種類と特徴							
ナンバリング	HSFM5001							

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51414			
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業			
担当教員	石田 和人		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	神経系は運動、記憶、学習、判断、創造性など多くの人間としての高次機能を発現する。さらに神経系は筋骨格系や内臓系との相互作用から、個体レベルの健康に関わる。このような視点から、病態モデル動物の活用およびヒトを対象とした研究を推進し、神経系に着目した健康科学に資する研究を進める。特に、先行研究の収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論を経て修士論文の作成へと研究を展開する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<p>本授業では、保健および医療の専門家として、常に研究マインドを持ち、人々の健康増進に寄与しうる人材の育成を目指し、研究課題に即した知識を収集力と分析・判断力を身に付け、研究実践に結び付ける。そのために、以下の内容を具体的目標とする。</p> <p>①研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 ②適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 ③研究を実施できる。 ④結果の吟味と考察できる。 ⑤修士論文を作成できる。 研究成果を発表し、討論できる。</p>						
テキスト（教科書）	特に指定しないが、必要に応じて適宜、資料等を配布する。						
参考書および参考文献	参考文献は講義時に紹介する。						
受講条件	特になし						
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当）						
成績評価	進捗状況報告（50%）、総合討論（50%） 詳細については、初回授業の際に説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
講義・研究全般への取り組み	80%		講義時に必要な学修の準備、課題への取り組み状況について評価する				
討論過程の内容	20%		講義演習について、自らの意見、疑問点を持ち発言明確にするなどの視点で評価する				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の検討を行い、研究を実施する。なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。（実務家教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○脳梗塞モデル動物を用いた理学療法効果の検証 ○抑うつモデル動物の確立 ○抑うつモデル動物に対する理学療法の基礎的検討 ○食生活と抑うつとの関連についての検討 ○呼吸法による抑うつおよび体調管理の可能性に関する検討 ○老年症候群に対する評価・介入に関する検討 <p>以上のテーマならびに関連領域の課題について、実験を通して仮説を検証する研究を健康科学特別研究Ⅱへと展開して、学位論文作成を目指す。</p>						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51415			
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業			
担当教員	富田 秀仁		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	<p>運動障害を改善することは理学療法の重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。</p> <p>各種の身体運動計測機器を用いてヒトの姿勢制御を分析することで、姿勢制御障害成立の機序やその回復のためのリハビリテーション技術に関わる課題の研究指導を行う。</p> <p>実際の研究活動を通して、姿勢制御機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能に関連する新たな知識を探求する。関連する先行研究を収集し、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。</p>						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<p>① 関連する先行研究を収集できる。</p> <p>② 適切な研究目的の設定ができる。</p> <p>③ 目的に合った研究方法を選択するための予備的な実験を実施できる。</p>						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	<p>予習・復習の内容（4時間相当）</p> <p>1. ヒトの身体運動について理解するための基礎となる、解剖学や生理学、運動学と解析手法について復習しておくこと。</p> <p>2. 関連する文献を読み、まとめておくこと。</p> <p>3. 研究手法について吟味し、適切に実施できるかを確認するために予備実験を行うこと。</p>						
成績評価	研究への取り組み、文献抄読、総合討論から総括評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
研究計画状況	30%		テーマに対応した適切な研究の計画が立案されていることを確認する。				
文献抄読	30%		テーマに対して適切な文献を読み、まとめられているか確認する。				
総合討論	40%		テーマについて十分な吟味を行い、質問に対して適切に回答できるかを確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集し、適切な研究目的の設定と方法の検討を行う。なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。（実務家教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○正常姿勢制御の検討 ○高齢者の姿勢制御の検討 ○神経疾患の姿勢制御障害の検討 ○整形外科疾患の姿勢制御障害の検討 ○内科系疾患の姿勢制御障害の検討 ○補装具を用いた場合の姿勢制御の検討 ○姿勢制御障害を改善するためのアプローチ法の検討 <p>ゼミナール形式によるディスカッションを中心に行う（双方向）。</p>						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51416			
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業			
担当教員	大島 弓子		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	この健康科学特別研究 I～Ⅲでは、看護の目的・本質や倫理、看護アセスメントと看護診断、看護方法等、実践看護学の基盤となる内容に関して、研究的な視点から捉え、研究として取り組む全プロセスの学修を目指す科目である。 健康科学特別研究 I では、あらゆる看護の対象者および看護実践場面に共通し、基盤となる現象を概念として捉えて研究的視点から探求するために、看護学における研究の視点及び文献探索を含む研究方法の特徴について学修を深める。そのうえで、自己の経験に基づく看護の現象、場面から研究テーマを見出す。また、関心あるテーマについて文献検討をもとに分析し、その現状や課題を研究取り組む意義を整理したうえで、この課題を明確にしていくための研究方法を検討し、研究の計画を立案する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 看護の目的・本質や倫理、看護アセスメントと看護診断、看護方法等、実践看護学の基盤となる内容に関して、研究的な視点から現状における課題は何か幅広く考察できる。 2) あらゆる看護の対象者および看護実践場面に共通し、基盤となる現象を概念として捉えて研究的視点から探求するために、看護学における研究の視点及び文献探索を含む研究方法の特徴の概括について理解できる。 3) 自己の経験に基づく看護の現象、場面から研究テーマを見出すことができる。 4) 自己の関心あるテーマについて文献検討をもとに分析し、その現状や課題を研究取り組む意義を整理できる。 5) 自己の研究課題に基づき、この課題を明確にしていくための研究方法を検討して妥当性のある方法を選択できる。 6) 自己の研究計画書を作成できる。 						
テキスト（教科書）	特に指定しない						
参考書および参考文献	参考文献は講義時に紹介する。						
受講条件	実践看護基礎学特論を受講していること						
事前・事後学習（内容・時間）	看護学における研究方法（量的、質的）について、幅広く学修しておくこと。日本、海外における看護学の学術誌における文献（英文も含む）を幅広く読んでおくこと。主体的に学修することが円滑に出来るよう自らの学修姿勢の長所、短所をフィードバックしておくこと。						
成績評価	講義・研究全般への取り組み、討論過程を総合的に評価する						
評価項目	割合		評価基準				
講義・研究全般への取り組み	80%		講義時に必要な学修の準備、課題への取り組み状況について評価する				
討論過程の内容	20%		講義演習について、自らの意見、疑問点を持ち発言明確にするなどの視点で評価する				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1) Introduction、自己の目標・学修計画の確認、看護学研究の動向（実務家教員及び双方向） 2) 看護学研究の現状、課題（実務家教員及び双方向） 3) 自己の経験に基づく看護現象、場面における関心事（実務家教員及び双方向） 4) 自己の経験に基づく看護現象、場面における関心事の再構成（実務家教員及び双方向） 5) 自己の関心事の研究的課題①（実務家教員及び双方向） 6) 自己の関心事の研究的課題②（実務家教員及び双方向） 7) 文献探索、文献検討①（実務家教員及び双方向） 8) 文献探索、文献検討②（実務家教員及び双方向） 9) 自己の研究課題の明確化（実務家教員及び双方向） 10) 研究方法の立案①（実務家教員及び双方向） 11) 研究方法の立案②（実務家教員及び双方向） 12) 研究方法の立案③（実務家教員及び双方向） 13) 研究計画の立案①（実務家教員及び双方向） 14) 研究計画の立案②（実務家教員及び双方向） 15) 研究計画の立案③（実務家教員及び双方向） <p>これらの内容について、ゼミ形式で、教授－学修の双方向で進行するため、授業計画は学修者のニーズに合わせて変更する。</p>						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51417			
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業			
担当教員	蒔田 寛子		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	看護の質を保証するために、改善が必要とされる看護の対象や活動の場の特徴に応じた看護活動について考察し、自らの研究課題を明確にする。研究課題に関連する分野の学問的体系を理解し、実践的な研究計画を立案し、最新の知見を踏まえてデータを分析し、修士論文を作成して公表する過程を修得する。さらに、看護研究に必要な論理的方法を修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護学上あるいは臨床上の課題を見出し、自らの研究テーマに絞り込むことができる。 2. 研究課題に関連する分野の学問的成果を体系的に整理し説明できる。 3. 研究課題に関連する分野の先行研究論文を吟味し、評価できる。 4. 研究課題を追究するのにふさわしい研究デザインを選択できる。 5. 研究計画書を具体的かつ正確に作成できる。 						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	その都度紹介する						
受講条件	特に無い						
事前・事後学習（内容・時間）	1単位の修得には45時間の学修時間が必要であることをふまえて、自己学修を行うこと。例えば、毎回の授業計画に沿って事前学修、プレゼンテーション資料の作成、事後の追加学修を行うこと。						
成績評価	受講態度、討論過程、プレゼンテーションから総括評価する						
評価項目	割合		評価基準				
受講態度	30%		主体的学修態度を確認する。				
討論課程	30%		討論での意見、受け答えを確認する。				
プレゼンテーション資料	40%		プレゼンテーション資料の内容、質問への対応等を確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究課題に関連する分野の学問的成果の整理（実務家教員） 2. 研究課題に関連する分野の先行研究論文の吟味と評価（実務家教員） 3. 研究テーマの決定（実務家教員） 4. 研究デザインの選定（実務家教員） 5. 研究計画書の作成（修士論文計画発表会）（実務家教員 双方向） 6. 研究倫理審査の申請（実務家教員） 7. データの収集（実務家教員） 8. データの分析（実務家教員） 9. データの解釈と考察（実務家教員） 10. 課題研究論文の作成（実務家教員） 11. 研究論文の発表（実務家教員） <p>1～11の一連の研究過程を通して、学位論文作成を目指す。課題の探求、研究計画立案、結果の吟味、学位論文の作成は、ゼミナール形式によるグループディスカッションを中心に行い、必要に応じて個別指導など、学生の進捗状況に合わせて行う。健康科学特別研究Ⅰ～Ⅲの中で、上記1～11を学生に合わせて進める。</p>						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51418			
科目	5141 健康科学特別研究 I		授業種別	週間授業			
担当教員	藤井 徹也		単位数	2			
その他担当者							
授業概要	看護の質を保証するために看護活動の改善が必要とされる看護の対象や活動の場の特徴に応じた看護活動について考察し、自らの研究課題を明確にする。研究課題に関連する分野の学問的体系を理解し、実践的な研究計画を立案し、最新の知見を踏まえてデータを分析し、修士論文を作成して公表する過程を修得する。さらに、看護研究に必要な倫理的方法を修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護学上あるいは臨床の課題を見出し、自らの研究テーマに絞り込むことができる。 2. 研究課題に関連する分野の学問的成果を体系的に整理し説明できる。 3. 研究課題に関連する分野の先行研究論文を吟味し、評価できる。 4. 研究課題を追究するのにふさわしい研究デザインを選択できる。 5. 研究計画書を具体的にかつ正確に作成できる。 						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	必要に応じて適宜紹介する						
受講条件	実践看護技術学特論を受講していること						
事前・事後学習（内容・時間）	事前学修、事後学修の内容（4時間相当） 毎回の授業計画に沿って、事前学修、事後学修をして臨むこと						
成績評価	研究への取り組み、討論内容から総合的に評価する						
評価項目	割合		評価基準				
講義・研究への取り組み	70%		主体的学修態度を確認する				
討論	30%		討論での意見、受け答えを確認する				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究課題に関連する分野の学問的成果の整理（実務家教員） 2. 研究課題に関連する分野の先行研究論文の吟味と評価（実務家教員） 3. 研究テーマの決定（実務家教員） 4. 研究デザインの選定（実務家教員） 5. 研究計画書の作成（第1・2回 修士論文検討会）（実務家教員） 6. 研究倫理審査の申請（実務家教員） 7. データの収集（実務家教員） 8. データの分析（実務家教員） 9. データの解釈と考察（実務家教員） 10. 課題研究論文の作成（実務家教員） 11. 研究論文の発表（実務家教員） <p>1～11の一連の研究過程を通して、学位論文作成を目指す。課題の探求、研究計画立案、結果の吟味、学位論文の作成は、ゼミナール形式によるグループディスカッションを中心に行い、必要に応じて個別指導など、学生の進捗状況に合わせて行う。健康科学特別研究Ⅰ～Ⅲの中で、上記1～11を学生に合わせて進める。</p>						
ナンバリング	HSFM5001						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51421			
科目	5142 健康科学特別研究Ⅱ		授業種別	週間授業			
担当教員	後藤 勝正		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	健康科学特別研究Ⅰに引き続き、生体は、種々の刺激（ストレス）を受容し、それに応答・適応する。さらに、発育・発達・成熟・老化や様々な疾病・疾患により生体の機能は大きく変容する。本特別研究では、骨格筋を主たるターゲットとし、骨格筋機能に関連する様々な生体機能とそれらに影響を与える因子を探索すると共に、生活の質（Quality of Life）や健康を維持増進していくために必要な生体応答に関する総合的な課題についての研究指導を行う。実際の研究活動を通して、生体機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能に関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法を選択し、関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を健康科学特別研究Ⅲへと順次展開する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」、「人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につける」、「自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現する」ことを目指す。そのために以下の到達目標を設定する。 ①研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 ②適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 ③研究を実施できる。 ④結果の吟味と考察できる。 ⑤修士論文を作成できる。 ⑥研究成果を発表し、討論できる。						
テキスト（教科書）	特に指定しない。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（2時間程度×29回）。 第1回目の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。準備学習や授業外学修事項については、必要に応じて授業中に指示する。						
成績評価	研究への取り組み、修士論文作成へ向けた進捗状況および総合討論から総括評価する。評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
進捗状況報告	50%		課題解決へ向けて、調査・実験計画が適切か確認する。				
総合討論	50%		質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という一連の研究過程を通して、学位論文作成を目指す。課題の探求、実験計画の立案、実験結果の吟味、学位論文の作成は、ゼミナール形式によるグループディスカッションを中心に行い、必要に応じて個別指導など学生の進捗状況に合わせて行う。（双方向） ○骨格筋機能の生理的・形態的評価 ○各種細胞外刺激と骨格筋の生理的・形態的適応 ○骨格筋損傷と再生 ○骨格筋機能とリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— ○骨格筋可塑性と遺伝子発現 ○骨格筋可塑性と筋衛星細胞 ○宇宙環境と生体機能の適応 ○特殊環境と生体機能の応答 ○骨格筋機能と生体機能との関係 ○生体諸機能の評価法の探求 ○QOLと生体機能 ○生体機能のリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— 以上のテーマならびに関連領域の課題について、実験を通して仮説を検証する研究を健康科学特別研究Ⅰに引き続き、そして健康科学特別研究Ⅲへと展開して、学位論文作成を目指す。						
ナンバリング	HSFM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51422			
科目	5142 健康科学特別研究Ⅱ		授業種別	週間授業			
担当教員	金井 章		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	人は、日常生活において、立つ、座る、歩く、などの各動作を繰り返し行っている。健康生活の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、3次元運動解析技術を用いて各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究実践能力を修得するため、以下の通り到達目標を設定した。 1. 関連する先行研究をまとめることができる 2. 研究目的を達成するために、妥当な研究方法を設定できる 3. 適切な方法を用いて研究が実施できる						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	その都度紹介する						
受講条件	特に無い						
事前・事後学習（内容・時間）	病態運動学論について復習しておくこと（第1回～30回/60分程度） ヒトの動作分析に係わる文献を読み、まとめておくこと（第1回～30回/60分程度） 研究手法について吟味し、適切に行う事が出来るか予備的実験を実施すること（第1回～30回/120分程度）						
成績評価	研究への取り組み（30%）、文献抄読（30%）、および総合討論（40%）から評価する						
評価項目	割合	評価基準					
研究実施状況	30%	テーマに対応した適切な研究の実施が行われているかを確認する					
文献抄読	30%	テーマに対応した適切な文献を読み、まとめられているかを確認する					
総合討論	40%	テーマについて十分な吟味を行い、質問に対して適切に回答できるかを確認する					
授業の実施方法と授業計画	以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の検討を行い、研究を実施する。（実務家教員） なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。 ○姿勢と動作の生体力学的検討 ○歩行の生体力学的検討 ○運動による関節ストレスの検討 ○動作と筋活動応答 ○シミュレーションによる障がい予測と予防 ○老化に伴う跨ぎと階段昇降動作の適応 ○転倒予防システムの開発 ○関節ストレス軽減装具の開発 ○運動機能回復リハビリテーションシステムの開発 ○運動機能のリハビリテーションその評価と新規手法の開発— * 授業内で適宜、質問や疑問に対するフィードバックを行なっていく。						
ナンバリング	HSFM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51425			
科目	5142 健康科学特別研究Ⅱ		授業種別	週間授業			
担当教員	富田 秀仁		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	<p>運動障害を改善することは理学療法の重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。</p> <p>各種の身体運動計測機器を用いてヒトの姿勢制御を分析することで、姿勢制御障害成立の機序やその回復のためのリハビリテーション技術に関わる課題の研究指導を行う。</p> <p>実際の研究活動を通して、姿勢制御機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能に関連する新たな知識を探究する。関連する先行研究を収集し、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。</p>						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<p>① 関連する先行研究をまとめることができる。</p> <p>② 研究目的を達成するために、妥当な研究方法を設定できる。</p> <p>③ 適切な方法を用いて研究が実施できる。</p>						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	<p>予習・復習の内容（4時間相当）</p> <p>1. ヒトの身体運動について理解するための基礎となる、解剖学や生理学、運動学と解析手法について復習しておくこと。</p> <p>2. 関連する文献を読み、まとめておくこと。</p> <p>3. 研究手法について吟味し、適切に実施できるかを確認するために予備実験を行うこと。</p>						
成績評価	研究への取り組み、文献抄読、総合討論から総括評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
研究実施状況	30%		テーマに対応した適切な研究の実施が行われているかを確認する。				
文献抄読	30%		テーマに対して適切な文献を読み、まとめられているか確認する。				
総合討論	40%		テーマについて十分な吟味を行い、質問に対して適切に回答できるかを確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集し、適切な研究目的の設定と方法の検討を行い、研究を実施する。なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。（実務家教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○正常姿勢制御の検討 ○高齢者の姿勢制御の検討 ○神経疾患の姿勢制御障害の検討 ○整形外科疾患の姿勢制御障害の検討 ○内科系疾患の姿勢制御障害の検討 ○補装具を用いた場合の姿勢制御の検討 ○姿勢制御障害を改善するためのアプローチ法の検討 <p>ゼミナール形式によるディスカッションを中心に行う（双方向）。</p>						
ナンバリング	HSFM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 春学期		授業コード	51426			
科目	5142 健康科学特別研究Ⅱ		授業種別	週間授業			
担当教員	大島 弓子		単位数	4			
その他担当者							
授業概要	看護学研究における多様な研究方法の特徴について理解したうえで、看護の本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、院生自身のもつ問題意識を明確にする。文献等の十分な検討の後、研究の意義をふまえたうえで、その事象の課題解決に合った研究計画を立案する。その研究計画書について倫理審査を経て研究遂行の基盤をつくる。一連の過程において、研究の倫理の重要性と、研究のプロセスについての重要性の学びを同時に修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1, 看護学研究における多様な研究方法の特徴について理解出来る。 2, 看護の本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、院生自身のもつ問題意識を明確に出来る。 3, 院生自身のもつ問題意識に関連した文献の検討が、多様な視点から出来る。 4, 看護学研究における多様な研究方法の特徴について理解出来る。 5, 院生自身のもつ問題意識に基づいて、研究の概念枠組み、研究テーマの決定が出来る。 6, 研究課題にそって、研究の意義を念頭に研究目的が設定出来る、 7, 研究計画を立案できる。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究デザインを構築できる。 2) 研究目的に適合した対象の設定が出来る。 3) 研究方法を立案・構築出来る。 4) 上記1)～3)において、その妥当性および研究の実現可能性を吟味出来る。 8, 研究計画に沿って、研究倫理審査資料の作成が出来る <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究デザインを構築できる。 2) 研究目的に適合した対象の設定が出来る。 3) 研究方法を立案・構築出来る。 4) 上記1)～3)において、その妥当性および研究の実現可能性を吟味出来る。 						
テキスト（教科書）	テキストとして特定のものは使用しない						
参考書および参考文献	参考書は講義中に紹介する						
受講条件	健康科学特別研究Ⅰ、実践看護基礎看護学特論を履修していること						
事前・事後学習（内容・時間）	国内、国外の研究課題に関連した文献を十分クリティークしておくこと						
成績評価	プレゼンテーションと討論、研究計画書内容から総合的評価する						
評価項目	割合		評価基準				
プレゼンテーションと討論	50%		看護学研究のテーマ、方法、文献検討を十分出来るためのプレゼンテーション、研究計画立案に向けてのディスカッションが十分出来ることを視点に評価する				
研究計画書内容	50%		自らの研究課題にそった適切な研究計画が立案でき、研究倫理審査に申請できる内容を作成できることを視点に、評価する				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1～4回目：看護学研究における研究法の特徴（実務家教員及び双方向） 5～8回目：研究課題の明確化（実務家教員及び双方向） 9～14回目：文献検討（実務家教員及び双方向） 15～17回目：研究テーマの決定（実務家教員及び双方向） 18～24回目：研究計画立案（実務家教員及び双方向） 25～29回目：研究倫理審査申請 30回目：研究計画の見直し、修正 <p>これらの内容について、ゼミ形式で、教授－学修の双方向で進行するため、授業計画は学修者のニーズに合わせて変更する。</p>						
ナンバリング	HSFM5002						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51431			
科目	5143 健康科学特別研究Ⅲ		授業種別	週間授業			
担当教員	後藤 勝正		単位数	6			
その他担当者							
授業概要	健康科学特別研究ⅠおよびⅡに引き続き、生体は、種々の刺激（ストレス）を受容し、それに応答・適応する。さらに、発育・発達・成熟・老化や様々な疾病・疾患により生体の機能は大きく変容する。本特別研究では、骨格筋を主たるターゲットとし、骨格筋機能に関連する様々な生体機能とそれらに影響を与える因子を探求すると共に、生活の質（Quality of Life）や健康を維持増進していくために必要な生体応答に関する総合的な課題についての研究指導を行う。実際の研究活動を通して、生体機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能に関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法を選択し、関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<p>本授業では、主として「健康増進に係る健康科学分野の基本概念と研究領域に必要な知識の修得」、「人々の健康に携わる一員としての自覚を持ち、健康寿命の延伸に貢献しようとする態度を身につける」、「自らが設定した研究課題を、適切な方策を用いて追究し、得られた知見を論理的に表現する」ことを目指す。そのために以下の到達目標を設定する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①研究テーマ候補を選択し、関連する先行研究を収集できる。 ②適切な研究目的の設定と方法の選択ができる。 ③研究を実施できる。 ④結果の吟味と考察できる。 ⑤修士論文を作成できる。 ⑥研究成果を発表し、討論できる。 						
テキスト（教科書）	特に指定しない。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	履修条件はない。						
事前・事後学習（内容・時間）	課題を設定するので、文献検討や実験などにより調べる（2時間程度×44回）。第1回目の授業時に、学習に必要な参考文献などを紹介する。準備学習や授業外学修事項については、必要に応じて授業中に指示する。						
成績評価	研究への取り組み、修士論文作成へ向けた進捗状況および総合討論および修士論文の審査の評価から総括評価する。評価についての詳細は、第1回目の授業において説明する。						
評価項目	割合		評価基準				
修士論文	80%		修士論文が適切に記載・提出されているか確認する。				
総合討論	20%		質問に対して適切に回答できるか確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という一連の研究過程を通して、学位論文作成を目指す。課題の探求、実験計画の立案、実験結果の吟味、学位論文の作成は、ゼミナール形式によるグループディスカッションを中心に行い、必要に応じて個別指導など学生の進捗状況に合わせて行う。（双方向）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○骨格筋機能の生理的・形態的評価 ○各種細胞外刺激と骨格筋の生理的・形態的適応 ○骨格筋損傷と再生 ○骨格筋機能とリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— ○骨格筋可塑性と遺伝子発現 ○骨格筋可塑性と筋衛星細胞 ○宇宙環境と生体機能の適応 ○特殊環境と生体機能の応答 ○骨格筋機能と生体機能との関係 ○生体諸機能の評価法の探求 ○QOLと生体機能 ○生体機能のリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— <p>以上のテーマならびに関連領域の課題について、実験を通して仮説を検証する研究を健康科学特別研究ⅠおよびⅡに引き続き学位論文作成を目指す。</p>						
ナンバリング	HSFM5003						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51432			
科目	5143 健康科学特別研究Ⅲ		授業種別	週間授業			
担当教員	金井 章		単位数	6			
その他担当者							
授業概要	人は、日常生活において、立つ、座る、歩く、などの各動作を繰り返し行っている。健康生活の維持、健康寿命の延伸のためには、これらの動作を行うための筋骨格系運動機能の増進・維持・回復が必要であり、欠かすことが出来ない。そのため、3次元運動解析技術を用いて各種動作を生体力学的に分析し、運動障がい成立機序や運動障がい回復のためのリハビリテーション技術に係る課題の研究指導を行う。実際の研究活動を通して、運動機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能を関連する新たな知識を追求する。関連する先行研究を収集、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 関連する先行研究をまとめることができる 2. 研究結果について整理し、適切な統計処理を行う事ができる 3. 研究の結果を考察し、修士論文をまとめることができる 						
テキスト（教科書）	特に設定しない						
参考書および参考文献	その都度紹介する						
受講条件	特に無い						
事前・事後学習（内容・時間）	研究結果を整理し、提示できるようまとめること（第1回～45回/60分程度） 統計手法について復習し、適切な統計解析を行うこと（第1回～45回/60分程度） 総合討論に基づき修士論文を適切に修正すること（第1回～45回/120分程度）						
成績評価	研究への取り組み、総合討論および修士論文から総括評価する						
評価項目	割合		評価基準				
総合討論および修士論文	100%		研究について適切に考察し、修士論文が適切にまとめられているかを確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集、適切な研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。（実務家教員）</p> <p>なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○姿勢と動作の生体力学的検討 ○歩行の生体力学的検討 ○運動による関節ストレスの検討 ○動作と筋活動応答 ○シミュレーションによる障がい予測と予防 ○老化に伴う跨ぎと階段昇降動作の適応 ○転倒予防システムの開発 ○関節ストレス軽減装置の開発 ○運動機能回復リハビリテーションシステムの開発 ○運動機能のリハビリテーション—その評価と新規手法の開発— <p>* 授業内で適宜、質問や疑問に対するフィードバックを行なっていく。</p>						
ナンバリング	HSFM5003						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期		授業コード	51435			
科目	5143 健康科学特別研究Ⅲ		授業種別	週間授業			
担当教員	富田 秀仁		単位数	6			
その他担当者							
授業概要	<p>運動障害を改善することは理学療法的重要な目的の一つである。ほとんどの場合、運動障害の背景には姿勢制御障害がある。つまり、運動障害を改善するには、その背景にある姿勢制御障害を改善する必要がある。</p> <p>各種の身体運動計測機器を用いてヒトの姿勢制御を分析することで、姿勢制御障害成立の機序やその回復のためのリハビリテーション技術に関わる課題の研究指導を行う。</p> <p>実際の研究活動を通して、姿勢制御機能の回復・維持・増進のための方策の計画・立案についての専門的知識や技能に関連する新たな知識を探求する。関連する先行研究を収集し、適切な研究目的の設定と方法の選択、研究の実施、結果の吟味と考察、総合討論、そして修士論文の作成という研究を展開する。</p>						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<p>① 関連する先行研究をまとめることができる。</p> <p>② 研究結果について整理し、適切な統計処理を行うことができる。</p> <p>③ 研究の結果を考察し、修士論文をまとめることができる。</p>						
テキスト（教科書）	特に設定しない。						
参考書および参考文献	必要に応じて紹介する。						
受講条件	なし						
事前・事後学習（内容・時間）	<p>予習・復習の内容（4時間相当）</p> <p>1. 研究結果を整理し、提示できるようにまとめること。</p> <p>2. 統計手法について復習し、適切な統計解析を行うこと。</p> <p>3. 総合討論に基づき修士論文を適切に修正すること。</p>						
成績評価	研究への取り組み、総合討論、修士論文から総括評価する。						
評価項目	割合		評価基準				
総合討論および修士論文	100%		研究について適切に考察し、修士論文が適切にまとめられているかを確認する。				
授業の実施方法と授業計画	<p>以下のテーマを中心として関連する先行研究を収集し、適切な研究目的の設定と方法の検討を行い、研究を実施する。なお、受講者の研究内容等により内容を変更することもある。（実務家教員）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○正常姿勢制御の検討 ○高齢者の姿勢制御の検討 ○神経疾患の姿勢制御障害の検討 ○整形外科疾患の姿勢制御障害の検討 ○内科系疾患の姿勢制御障害の検討 ○補装具を用いた場合の姿勢制御の検討 ○姿勢制御障害を改善するためのアプローチ法の検討 <p>ゼミナール形式によるディスカッションを中心に行う（双方向）。</p>						
ナンバリング	HSFM5003						

開講年度・開講学期	2020年度 秋学期			授業コード	51436		
科目	5143 健康科学特別研究Ⅲ			授業種別	週間授業		
担当教員	大島 弓子			単位数	6		
その他担当者							
授業概要	看護の本質と目的、対象論、実践への方法論の見地から、生自身のもつ問題意識を明確にしたうえで、院生が作成した研究計画に基づき、研究を遂行し、十分な考察を加えて修士論文としてまとめ、成果を発表する。また、その一連の過程において、研究の倫理の重要性を同時に修得する。さらに、研究課題を明らかにするにあたり、倫理的配慮の必要性和研究の適切なプロセスをふむ必要性についても十分、修得する。						
ディプロマポリシー	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5		
ディプロマポリシーとの関連性	◎	○	○	◎	◎		
授業の到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1, 院生自身の持つ問題意識からの研究目的、研究方法を再検討出来る。 2, 研究倫理審査の結果をふまえ、研究の倫理配慮を再確認で出来る。 3, 研究計画にそって、研究を実施出来る。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 研究対象の選択、依頼等の過程を適切に出来る。 2) 研究方法の精練、妥当性を目指した準備が出来る。 3) 研究方法に基づく実施が出来る。 4) 研究成果の集計・分析が出来る。 5) 研究成果の考察が出来る。 4, 研究を論文として作成出来る。 5, 研究成果を発表し、適切な質疑応答が出来る。 						
テキスト（教科書）	テキストとして特定のものを使用しない						
参考書および参考文献	参考書は講義中に紹介する						
受講条件	実践看護基礎看護学特論および健康科学特別研究Ⅰ、Ⅱを履修していること						
事前・事後学習（内容・時間）	予習・復習の内容（4時間相当） 研究計画書が立案できており、研究倫理審査を承認されている状況が準備としてされること						
成績評価	研究計画書が立案できており、研究倫理審査を承認されている状況が準備としてされること						
評価項目	割合		評価基準				
論文内容	70%		論文内容が、研究の問題提起・意義、目的、方法、結果、考察、結論が内容的に一貫して展開、まとめられており、看護学研究として価値付けられるかという視点について評価する				
研究実施の取り組み	30%		研究を計画通り、丁寧に遂行でき、得られたデータを誠実に集計し、文献と比較して分析できる、これらの過程を自主的自立的に、助言を得ながら遂行したかの視点で評価する				
授業の実施方法と授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1、研究に必要な準備学修、プレテスト（実務家教員及び双方向） 2、研究データの収集（実務家教員及び双方向） 3、データの集計（実務家教員及び双方向） 4、データの分析（実務家教員及び双方向） 5、データの考察（実務家教員及び双方向） 6、論文作成（実務家教員及び双方向） 7、論文の発表、質疑応答（実務家教員及び双方向） <p>健康科学特別研究ⅠおよびⅡに引き続き、一連の研究過程を通して、学位論文作成を目指す。研究課題の明確化、文献検討、研究テーマの決定および研究計画立案は、ゼミナール形式によるグループディスカッションを中心に行い、必要に応じて個別指導など学生の進捗状況に合わせて行う。（実務家教員及び双方向）</p>						
ナンバリング	HSFM5003						